論文

墳丘墓からみる弥生時代後半期の山陰地方

―器台形土器の地域性を中心として―

笠見　智慧

要旨

本稿は、現在の山陰地方に分布する四隅突出型墳丘墓が当時の社会においてどのような役割を果たし、共有されていたのかについて明らかにすることを目的とする。この課題に対し、墳丘の突出部の形態と器台を中心とする土器の二つの側面から検討を行った。まず、中期後葉から後期初頭の変遷を整理し、突出部の検討から踏石状石列を持つタイプは江ノ川流域・西出雲地域に広がり、墳丘を楕円に削り出し楕円の突出部を持つタイプは三次東部の西城川から西伯耆地域に伝播するルートを予想し、この伝播・拡散ルートを脚付長頸壷と脚付注口鉢の分布と墳墓における利用の共通性によって裏付けた。続く、弥生時代後期中葉から終末期については、突出部の形態と器台形土器の二つの側面から検討を行った。弥生時代後期中葉には突出部の長大化が起こるとともに地域性が次第に明確になる。この地域性は突出部の違いだけにみられるものではなく、採用する墳丘形態そのものにも認められた。後期後葉に四隅突出型墳丘墓は突出部の地域性を保ったまま出雲地域において大型化し最盛期を迎える。この様相は大きく終末期に変化し、各地で突出部の表現が曖昧な四隅突出型墳丘墓が造営され、地域性は希薄となり墳丘墓は斉一性を持ち始めるようになる。一方、器台系土器では後期中葉に山陰地方の鼓形器台の文様に地域の特徴が現れ始め、後葉にその地域性が最も明確になる。そして、終末期に各地とも扁平化・無文化する。山陰地方では後期中葉から後葉にかけて地域性が明確になり、終末期に斉一性が高まることが複数の点から明らかとなった。以上の成果から、①出現から後期中葉までの墳丘墓発達段階、②後期後葉の四隅突出型墳丘墓の完成期完成期であり地域性が最も顕著になる段階、③終末期の地域性の希薄化と山陰全体にわたる斉一性の萌芽期という三つの段階を設定し、四隅突出型墳丘墓の役割は各段階によって変化することを示した。

1．はじめに

弥生時代後期後半は、西日本全域において大きな変化のみられる時期である。九州地方では甕棺墓が盛んに採用され、鏡の副葬がみられるようになり、本州西部では、岡山県倉敷市楯築墳丘墓や島根県出雲市西谷３号墓、京都府京丹後市赤坂今井墳丘墓と各地に大型の墳丘墓が出現する。楯築墳丘墓や西谷３号墓では厚さ 30cm 前後、重さにして数十 kg に及ぶ朱が墓壙内に使用され、赤坂今井墳丘墓をはじめ丹後半島では鉄刀などが多数副葬されるなど、それまでの墳墓を大きく引き離す内容を示す。このように弥生時代後半期頃、西日本各地に大きな権力あるいは特別な地位をもった人・集団が現れ始めたことがうかがえる。

現在の島根県、鳥取県を中心とする地域には「四隅突出型墳丘墓」と呼ばれる方形の墳丘の各隅に突出部のついた形をした墳丘墓が弥生時代中期末から終末期まで採用された。ある特定の墳形が一つの平野や水系の範囲を越えて共通して採用される現象は、古墳時代に前方後円墳が東北から九州まで及ぶ広い範囲に拡散したことを想起させる。

四隅突出型墳丘墓と同じ時期に発達するもう一つの要素として「器台形土器」（以下、「器台」）がある。器台は弥生時代中期後葉ごろの西日本各地でみられるようになる土器であるが、その形は各地域によって大きく異なる。本論文の対象地域である山陰地方では、楽器の鼓のような形をしていることから鼓形器台と名付けられた器台が広く分布する。器台は出現の時期が墳丘墓の出現する時期と重なることに加え、集落よりも墳墓から多く出土する傾向があることから、器台の出現と墳丘墓の出現・変化との間には何かしらの関係が予想される。

本論文では四隅突出型墳丘墓がどのように拡散したのかあるいは共有されていたのかについて、四隅突出型墳丘墓と器台を中心とした墳丘墓から出土する土器の関係の検討から、弥生時代後期の山陰地方がどのように変化し、また四隅突出型墳丘墓が当時の社会においてどのような役割を果たしていたのかについて考察を行うことを目的とする。

2．先行研究と課題

四隅突出型墳丘墓は 1968 年から翌年にかけて調査が行われた島根県邑南町（旧・瑞穂町）順庵原１号墓ではじめて確認された。順庵原１号墓は墳丘の形態や墳裾の立石、さらには墳丘のそばにある円形のストーンサークルなどそれまでにない要素ばかりであった。

その特異性から発見当初より注目を集めていたが、類似する例がなかったために発見当初は古墳発生期の山間部に特異な「古墳」の一種と認識されていた。

その後、1970 年代に島根県安来市の荒島丘陵において仲仙寺墳墓群や安養寺古墳群、宮山Ⅳ号墓など同様の墳墓が平野部でも確認された。そして、それらに共通する墳丘形態や墳丘斜面の貼石、墳裾の石列などを重視し、とりあえず「四隅突出形方墳」という墳墓名称が用いられることとなった（山本 1975）。

四隅突出型墳丘墓が当初古墳とされた背景は、上記の墳墓から出土する土器がどれも古式土師器と認識されていたことが大きい。この認識は 1970 年台後半の山陽側からの指摘によって大きく変化する。一つは近藤義郎によって弥生時代の墳墓の中で盛土により築造された墳墓を「弥生墳丘墓」とする考えを提示されたことである（近藤 1977）。それまで高い墳丘を持つ墳墓は全て古墳時代の所産であるとされていたが、近藤は楯築墳丘墓をはじめとする弥生後期の墳墓と古墳時代前期の墳丘墓の間には大きな違いがあることを指摘し、弥生時代にも墳丘を持つ墳墓が存在することを示した。この論考によって、弥生時代にも高い墳丘をもつ墳墓が存在するという認識が広がるようになった。もう一つの重要な指摘は、藤田憲司による土器編年への言及である。藤田は山陰・山陽地域の土器型式の並行関係をそれぞれⅠ～Ⅴ期に区分し対比することで、的場式・鍵尾式を弥生時代後期の範疇に入るものであるとした。そして山陰地方の四隅突出型の墳墓から出土する土器は古墳時代ではなく、弥生時代後期に属することを指摘したのである（藤田憲 1979）。両者の指摘を受け、「四隅突出形方墳」とされ古墳の一類型であった四隅突出型墳丘墓は、古墳時代ではなく弥生時代に属する墳丘墓の一類型として認識されるに至ったのである。

墳丘墓としての認識がされるようになってまもなく、1983 年から西谷墳墓群の調査が島根大学考古学研究室によって行われ、この調査の中で西谷３号墓の調査も行われた。既に行なわれていた測量調査の結果とあわせ、西谷３号墓は墳丘規模、外表施設、埋葬施設の特殊性、副葬品などの諸要素において傑出しており、弥生墳墓の一つの到達点としての姿が明らかになった（渡辺 1992）。同時に前期古墳との差、四隅突出型以外の墳墓や土壙墓・木棺墓との比較など検討すべき課題をも浮上させるなど、その後の四隅突出型墳丘墓研究の方向性に大きな影響を与える調査であった。

これまでに四隅突出型墳丘墓について数多くの研究があり、一つの到達点に達しているとも言えるほどの成果がある。特に、四隅突出型共有の背景については発見当初から各氏による言及がある。これまでの言及では、事実上ないし事実と観念された「同祖同族関係」（近藤 1983）、「山陰地域連合」とでも称すべき首長たちの連帯（東森 1989）、観念的相違としての山陰大社会を形成する「象徴」（寺沢 1996）など、四隅突出型墳丘墓とは山陰地方において集団の紐帯が形成されたことを示すという評価が多い。また、宮山Ⅳ号墓の調査を行った松本岩雄は、墳裾の立石の段数と規模の関係から四隅突出型墳丘墓の中に階層の差があることを明らかにした（松本 2003）。

突出部の分類・検討も行われており、四隅突出型墳丘墓の各地への展開過程、突出部の地域性、突出部の機能など多方面への言及が進んでいる。桑原隆博は突出部の意味について、山間部での四隅突出型墳丘墓の発達の背景に山陰地方沿岸部からの影響を想定し、土井ヶ浜の人骨の四隅に置かれた石の意識と関連付け、突出部＝「四隅を護るもの」とした（桑原 1986）。伊藤実も弥生時代前期以降の山陰地方にしばしばみられる配石墓は中のものを封じ込める思想を反映しており、四隅突出型墳丘墓の突出部はその思想の延長にあるとしている（伊藤 2005）。

一方、渡辺貞幸は踏石状石列（ステッピングストーン）と立石に着目し、「閉じた」突出部と「開いた」突出部が一つの墳丘の中に混在し、開いた突出部のみが通路としての役割を果たしていたものであるとする（渡辺 1992,2003）。川原和人も突出部のうち一箇所のみ幅広の突出部が存在し、そこが通路の機能を果たしたとした。川原はその上で、立石については墳丘の保護と墓域の区画の役割があったとする（川原 2013）。土器編年において重要な指摘をした藤田は突出部について通路思想・通路施設・先端形態・通路規模の四つの観点から分類を行い、地域性が早い段階に成立していたことを指摘した（藤田憲 2010）。

突出部や墳丘規模などからの言及にやや遅れつつ、出土資料からの検討も徐々に増えてきている。山陰地方では、主体部上から土器がまとまって出土することが早い段階から認識はされていたが、編年資料としての認識が強かった。その中で、渡辺貞幸は岡山県の楯築墳丘墓出土土器に対する近藤義郎の論考（近藤 1992）を踏まえ、西谷３号墓の事例を首長墓における儀礼行ための痕跡とした。西谷３号墓では、朱の精製に使われたとされる円礫や墓壙埋め戻し後に一時的に建てられた建造物の巨大な柱穴が発見され、首長墓における葬送儀礼の一端を残す。さらに丹後や吉備をはじめ他地域の土器も複数確認されており、対外関係についても注目される (渡辺 1993)。重松辰治は四隅突出型墳丘墓に限らず、墳墓から出土する土器の器種について、それぞれの墳丘墓における器種組成の変化や集落での器種組成の変化との関係、さらに土器の出土

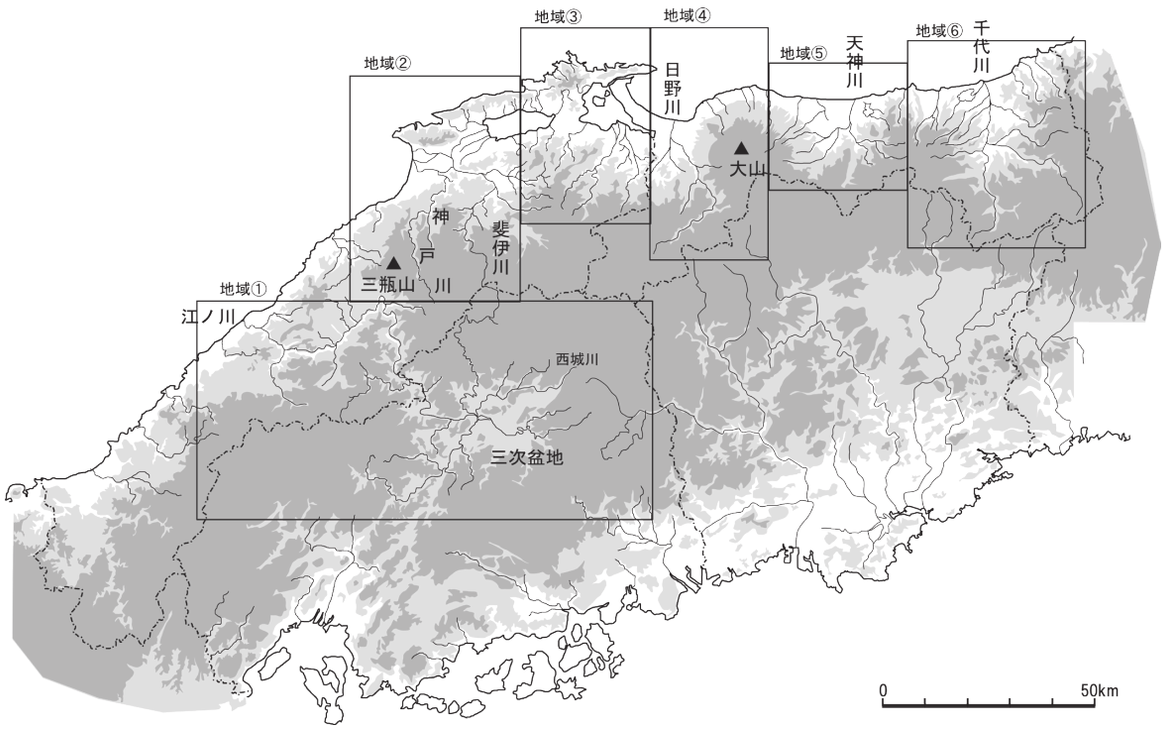


図１　対象地域と小地域の設定

状況からの葬送行為の復元を行った（重松 2007）。

このように四隅突出型墳丘墓を中心とした山陰地方の弥生墓制研究の蓄積は大きい。一方で、四隅突出型墳丘墓の特異性や西谷３号墓をはじめ大型の墳丘墓が存在する特定の地域の印象があまりにも強く、そこに山陰地方全体の評価が引っ張られているようにも見受けられる。また、墳丘墓の展開については墳丘墓そのものからの検討への偏りがみられ、別の要素からの検証や出土土器の検討は未だ不十分と言わざるを得ない。

したがって、本論文ではまず四隅突出型墳丘墓について突出部の分類案を提示し、その分類を元に四隅突出型墳丘墓の地域性と地域間の関係を明らかにする。その上で、器台形土器を中心として墳丘墓から出土する土器の地域性の検討をあわせて行うことで、山陰地方の中での四隅突出型墳丘墓の位置づけと共有の実態に迫りたい。

３．対象と時間軸

３－１．対象地域

本稿では四隅突出型墳丘墓の分布する現在の島根県と鳥取県を中心に、広島県山間部の三次盆地周辺を加えた地域を対象とする。上記地域を河川流域をもとに、①三次及び石見（江の川流域）・②西出雲（斐伊川・神門川流域）・③東出雲（飯梨川・伯太川流域）・④西伯耆（日野川流域）・⑤東伯耆（天神川流域）・⑥因幡（千代川流域）の６つの小地域を設定する（図１）。

表１　本論文における編年と併行関係

		赤澤 (1992)	松本 (1992)	清水 (1992)	松井 (1999)
弥生中期	中葉		Ⅲ-1	Ⅲ-1	
				Ⅲ-2	Ⅰ
			Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅱ
	後葉		Ⅳ-1	Ⅳ-1	Ⅲ
				Ⅳ-2	
			Ⅳ-2	Ⅳ-3	Ⅳ
弥生後期	前葉	草田１	Ⅴ-1	Ⅴ-1	Ⅴ
	中葉	草田２	Ⅴ-2	Ⅴ-2	Ⅵ
	後葉	草田３	Ⅴ-3	Ⅴ-3	Ⅶ
			Ⅴ-4	Ⅵ-1	Ⅷ・Ⅸ
終末期	庄内併行	草田４			Ⅹ
		草田５		Ⅵ-2	
古墳時代	布留式併行	草田６			Ⅺ
		草田７			ⅩⅡ
					ⅩⅢ

３－２．時間軸

本論文は四隅突出型墳丘墓の出現期である弥生時代中期から、終焉期である古墳時代初頭までを対象とする。また、赤澤秀則による島根県松江市草田遺跡出土土器に基づいた草田編年（赤澤 1992）と松井潔による松井編年（松井 1997）を基準に、1992 年に発表された『様式と編年』（松本 1992・清水 1992）を加えることで各地域の並行関係を捉えることとする。

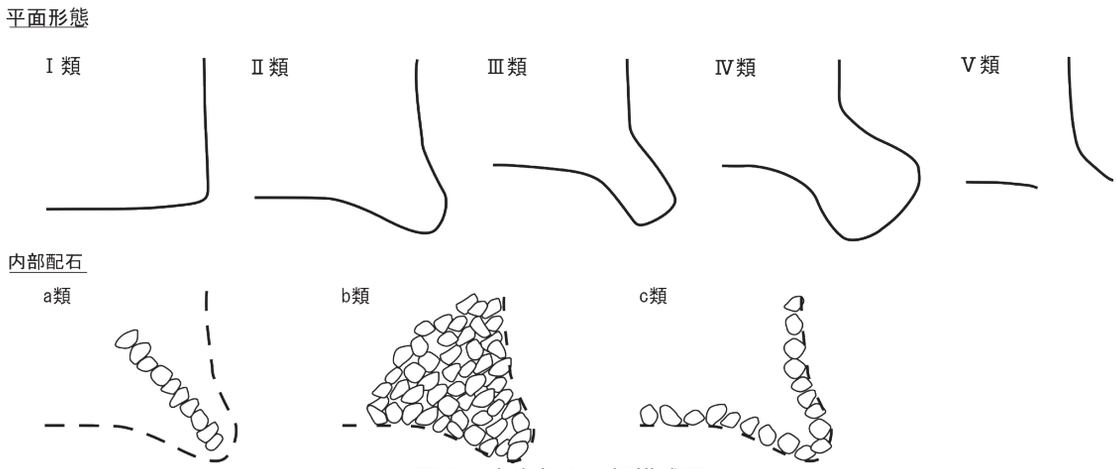


図２　突出部の分類模式図

各編年の併行関係及び時期区分との対応は表に示すとおりである[1](表１)。

４．四隅突出型墳丘墓の成立

４－１．突出部の分類

四隅突出型墳丘墓の最大の特徴は突出部にあり、墳丘墓同士の違いが最もはっきりみられるのも突出部である。そこで本稿も突出部に着目し、突出部の分類を元に四隅突出型墳丘墓の伝播と変遷を検討する。本論文ではおもに川原和人（川原 2013）と藤田憲司（藤田憲 2010）の分類方法を大きく参考にし、以下のように平面形態をＡ～Ｅ類の五つ、突出部内部の配石状況を１～３類の三つに分類し、それぞれを組み合わせて用いる（図２）。

＜平面形態＞

Ⅰ類…貼石の辺が直線的で角が直角に近いもの

Ⅱ類…先端が丸くなるもの

Ⅲ類…突出部先端に角があり、長方形を呈するもの

Ⅳ類…突出部基部に対して先端部分の幅が広く袋状を呈するもの

Ⅴ類…配石のみが突出部付近で明らかに外側に開くもの

＜内部配石＞

a 類…中央に１列に並ぶ配石を持つもの（＝踏石状石列のあるもの）

b 類…内部を埋めるように無秩序に石が置かれるもの（＝踏石状石列を持たないが配石をもつ）

c 類…突出部内部に配石をともなわないもの

４－２．四隅突出型墳丘墓の起源諸説

四隅突出型墳丘墓は特異な形状を持ち、その起源については発見当初より言及されてきた。その方向は大きく朝鮮半島起源説と日本列島起源説に分かれる。

発見当初、多くみられたのは朝鮮半島起源説であった。その提唱者である山本清は各四隅突出型墳丘墓の共通点として墳裾の配石構造（＝敷石帯）に着目し、分類を行った。そして山本はこの敷石帯が高句麗将軍塚と類似するとして、四隅突出型墳丘墓の起源は朝鮮半島にあると主張したのである（山本 1975）。同様の朝鮮半島起源説は 80 年代を中心にみられるが[2]、配石構造の違いがあることや直接的な関係を示す根拠がないことなどの問題を含んでいた。

一方の日本列島起源説はその中で方形周溝墓に起源を求めるものと方形貼石墓に起源を求めるものがある。

方形周溝墓に起源を求める考えは小野山節によって提唱され（小野山 1979）、その後は都出比呂志・春成秀爾に引き継がれた。都出は四隅を残して溝を掘る周溝墓の陸橋部を通路と捉え、四隅突出型墳丘墓の突出部が同様な機能を備えたものとし、周溝墓にその起源があると主張した（都出 1991）。春成は遺体が通るだけの通路なのであれば一隅のみで十分であるはずにもかかわらず、四隅全てが突出するのは通路が単なる遺体運搬のための通路ではなく「現世と他界とを画す境道の道」だったのではないかとし、周溝墓起源説に立ちながらも都出とはやや異なる立場をとった（春成 1979）。これら方形周溝墓からの発達を想定する説は貼石墓からの発達が有力視されるようになるにつれ、次第に下火になっていった。

方形周溝墓起源説にやや遅れて提言された方形貼石墓起源説は、川原和人によって初めて示された考えである。川原は突出部の形態の分類などから四隅突出型墳丘墓は、中国山間部における方形貼石墓にその起源があるとした（川原 1978）。以降、中国地方の中でも特に山間部に起源を求める考えが次第に有力視されるようになりつつあったが、近年の島根県出雲市青木４号墓の発見により、中国地方を起源とする考えの妥当性に対する見直しの必要性が指摘された（桑原 2005）。この発見によって、山陰地方沿岸部から中国地方山間部の広い範囲のなかで相互に影響しあいながら成立したとの考えも出された（伊藤 2005）。

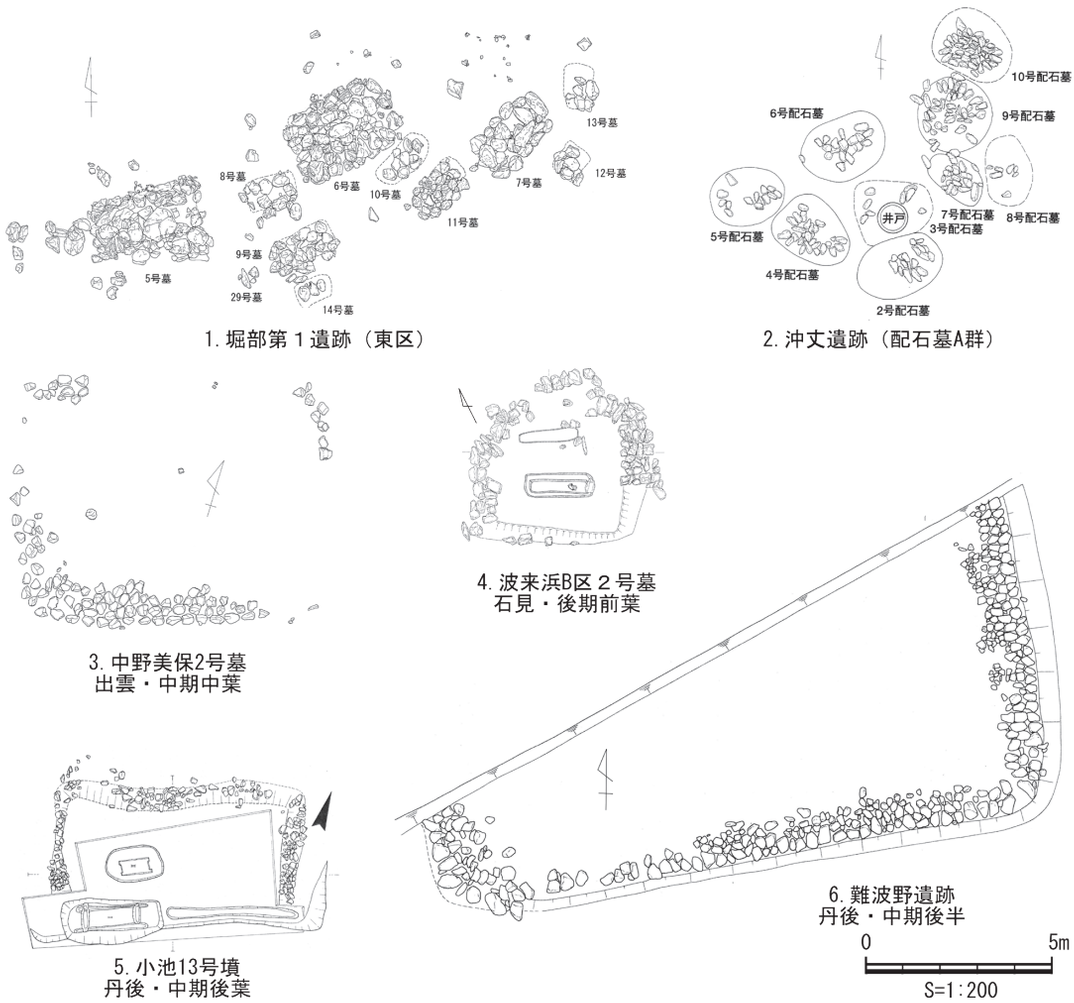


図３　日本海沿岸部における弥生時代前期の配石墓及び中期の方形貼石墓

四隅突出型墳丘墓の起源がどこにあるのかについては事例の増加などとともに議論が続けられている。しかし、発達の過程を連続的に追うことができる地域はほとんどなく、四隅突出型墳丘墓の起源については貼石墓からの展開である点について概ね共通の理解を得られているのみで、起源地がどこであるのかについては決定打を打ちかねている。

４－３．日本海沿岸部の方形貼石墓

四隅突出型墳丘墓は前述の通り方形貼石墓からの展開が有力視されているが、山陰地方の墓域において配石構造を伴うようになるのは方形貼石墓がみられる弥生時代中期よりも古く、弥生時代前期の土壙墓の段階にすでにみられる。方形貼石墓が出現する以前、弥生時代前期の山陰地方では土壙墓や木棺直葬墓が一般的であった。そのうち、出雲地域と広島県の山間部地域では墓壙上に配石を伴う遺跡がみられ、島根県松江市堀部第一遺跡（赤澤 2005）や同美郷町沖丈遺跡（牧田 2001）など配石を伴う例は山間部と沿岸部の両方で確認されている。堀部第一遺跡では 60 基近くの土壙墓が長者の墓と呼ばれる円形の高まりを中心に配置され、ほとんど全ての墓壙上面に配石が認められる（図３- １）。堀部第一遺跡では角張った平石を用いて墓壙上面を覆い尽くすように配石されているが、時期の近い島根県松江市古浦遺跡（藤田等・赤澤 2005）では角張った平石が頭部直上のみあるいは墓壙上にまばらに置かれる。また、山間部の沖丈遺跡では丸みを帯びた石を墓壙上面に敷き詰めるようにして配石する（図３- ２）。このように配石行為そのものは共通の要素であるがその方法には差がある。

中期前葉の山陰地方沿岸部の墓制はほとんど事例がなく、前期から中期への移行期の様相ははっきりしない。中期中葉の例は島根県松江市友田Ｂ区１号墓（岡崎 1983）や同出雲市中野美保２号墓（仁木 2004）など、配石によって方形に区画する方形貼石墓がわずかに確認されている（図３- ３）。前期の配石墓が山陰地方一部の狭い範囲に限られたのとは異なり、中期中葉から後葉の段階における方形貼石墓は、山陰地方だけではなく島根県西部の石見から兵庫県北部の丹後半島にまでその分布が拡大する（図３- ４・５・６）。

その後、島根・鳥取県域では貼石の密度に違いや変化がおこりながらも、弥生時代終末期まで途絶えるこ

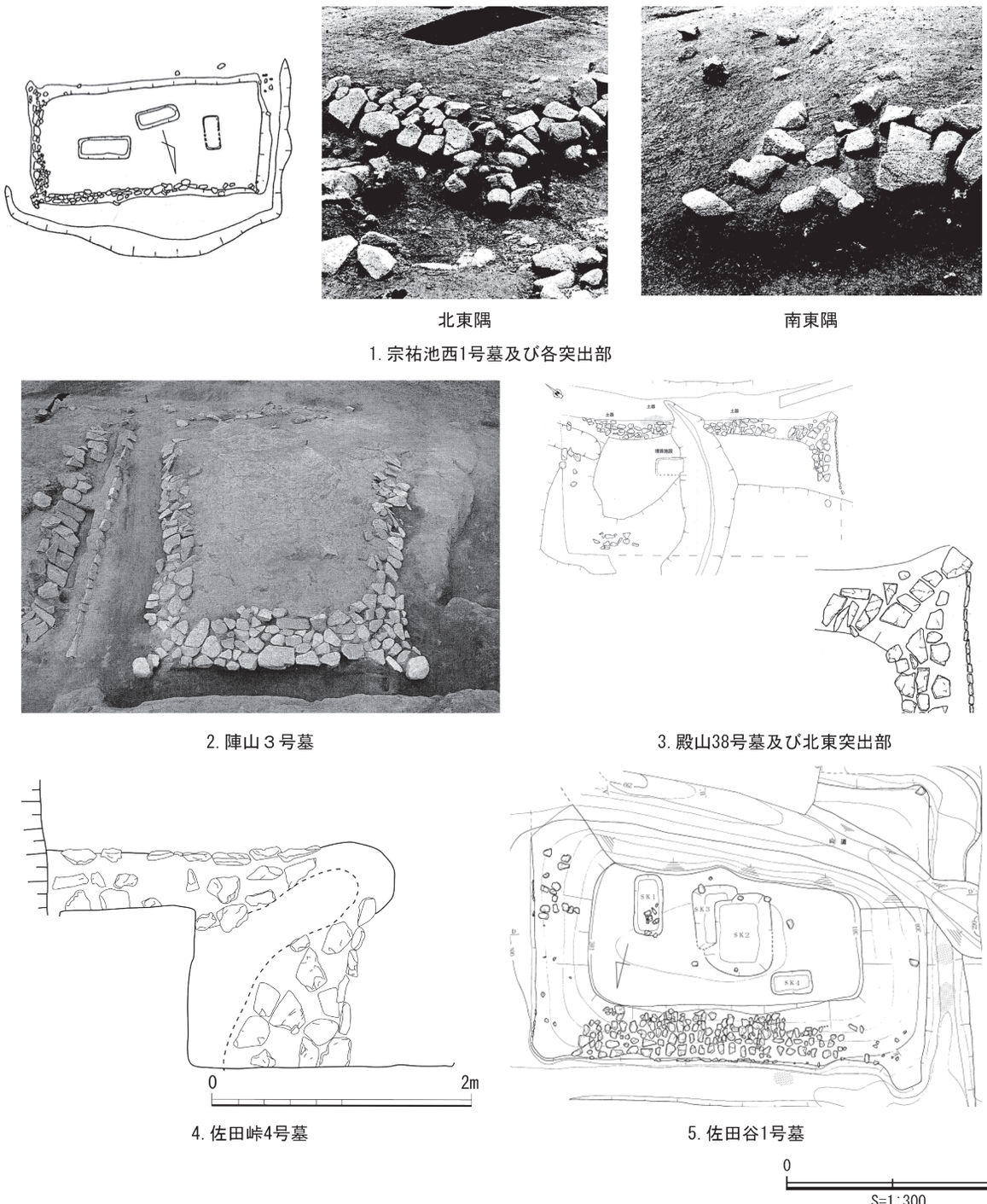


図４　三次盆地周辺における中期後葉の四隅突出型墳丘墓

となく貼石が採用され続ける。一方の丹後半島では貼石行為は継続せず、後期に入ると四隅を意識した配石はおろか墳墓における石材の使用そのものが失われ、配石構造を持たない台状墓が採用されるようになる。

前期の墓域において配石を行う主な目的は、墓壙の位置を示すという標石の役割にあったと考えられる。やがて墓壙のみではなくその範囲を示すものへと変化することによって、墓壙上の配石からある一定の区画を囲む方形貼石墓へ、そして四隅突出型墳丘墓の成立へと繋がっていくものと考えられる。

４－４．中期後葉から後期前葉の四隅突出型墳丘墓

方形貼石墓の中から次第に、隅を意識した配石を伴うものが出現する。本節では先に提示した分類をもとに突出部の配石について検討を行う。

（１）三次盆地

広島県北部の山間部、江ノ川上流域に位置する盆地であり、弥生時代中期末から後期初頭にかけての出現期の四隅突出型墳丘墓が集中する地域である。この地域の突出部の様子は東側の江ノ川流域と西側の西城川流域の二つに大別される。

広島県三次市宗祐池西１号墓（尾本原 2000）は三

次盆地の中央に位置し、当地域の中でも最も古い段階に位置付けられている墳丘墓である。１号墓は三つの埋葬施設をもつ、長方形の貼石墳丘墓である。最も残りの良い北東隅は２列の石列が辺の外縁よりもやや外側に出るような形で置かれている。南東隅や北西隅は１列の石列が並べられたⅠａ類の隅である（図４- １）。同じく広島県三次市の陣山墳墓群（落田 1996）では緩やかに傾斜する丘陵上の平坦面で５基の四隅突出型墳丘墓が確認されている。陣山墳丘墓群ではそれぞれの墳墓に異なる要素がみられる。また、２号墓の南西・北西隅はそれぞれ辺が真っ直ぐで隅に一列の石列をもつⅠａ類であるが、南西隅では墳丘斜面に石列が並ぶが石列は外側まで伸び、もう一方の北西隅では石列が辺よりも外側へと伸びる、と一つの墳墓の中でも異なる様子が確認されている（図４- ２）。３号墓南西隅もⅠａ類を示すが踏石上石列の両脇に貼石が伴っている。４号墓では一度囲んだ外側に埋葬施設が増設された際に、その部分を囲む貼石も付け足されているのが確認でき、貼石には埋葬施設の配置を明示する意図があったことがうかがえる。５基の墳墓から出土する土器はどれも塩町式土器（＝中期後葉）であり、四隅突出型の出現当初から様々な要素がみられ、突出部の変化が短い期間に起こっていたことがわかる。

陣山遺跡においていま一つ着目したい点が立石である。陣山２号墓では貼石との間にやや平坦面を開けて、石材が一列に並べられているのが観察できる。同様の配石は同じ三次盆地の中期後葉に位置付けられる広島県三次市殿山 38 号墓（道上 1987）にもみられ、墳裾における立石が墳墓の大型化に伴って成立したものではなく、出現当初から配石構造の構成要素に含まれていたことがわかる (図４- ３)。

続いて西側の西城川流域の例について検討を行う。西城川流域の四隅突出型墳丘墓の例は三次盆地と比較すると少ない。当地域で最も古いとされる四隅突出型墳丘墓は広島県庄原市佐田峠４号墓 (野島 2018) である。墳丘全体の残存状況が悪く、西辺から北隅がかろうじて確認できる程度であるが、その北隅は墳丘自体の隅を楕円形にやや突出させるように削りだしている（図４- ４）。貼石は辺から突出部の基部までのみで、突出部の内側には配石がないⅡｃ類となる。この佐田峠４号墓が先端部の平面形態に丸みをもたせる最初の例である。西城川流域において佐田峠４号墓に後続するのは広島県庄原市佐田谷１号墓（妹尾 1982）である。佐田谷１号墓も墳丘全体の残存状況が悪く、突出部の貼石が流れてしまった可能性も否定できないが、現状では佐田峠４号墓と同様に墳丘自体の隅をやや突出するように成形し、突出部の内部に貼石のないⅡｃ類と判断できる（図４- ５）。佐田谷１号墓では墳裾において、他に比べて明らかに小ぶりな石を選択し１列に並べている。三次盆地と同様に、西城川流域でも墳裾の立石が採用されていたようである。

（２）日本海沿岸部

山間部において突出部を意識した墳丘墓が複数確認される一方で、沿岸部の中期後葉に位置付けられる例は少ない。

島根県出雲市の青木４号墓（今岡 2006）は日本海沿岸部において唯一中期中葉に位置付けられる例で、踏石状石列だけが辺から突出するⅠａ類となっている（図５- １）。出土遺物や墳丘の詳細等、不明な点は残るものの、山間部と沿岸部の両方において同じⅠａ類が採用されていることを示す重要な例である。

青木４号墓を除いたこの時期の沿岸部の四隅突出型墳丘墓は後期初頭の日野川下流域に集中し、さらにそのほとんどが現在の鳥取県大山町と同米子市にまたがる妻木晩田遺跡に含まれている。鳥取県米子市尾高浅山１号墓（米子市埋蔵文化財センター 2015）は西伯耆地域で確認されている四隅突出型墳丘墓の中でもっとも古いと考えられている墳墓で、その突出部は先端が丸く、突出部内部の配石は明確な列をなさず無秩序に埋めるⅡｃ類である（図５- ２）。辺の一部には断

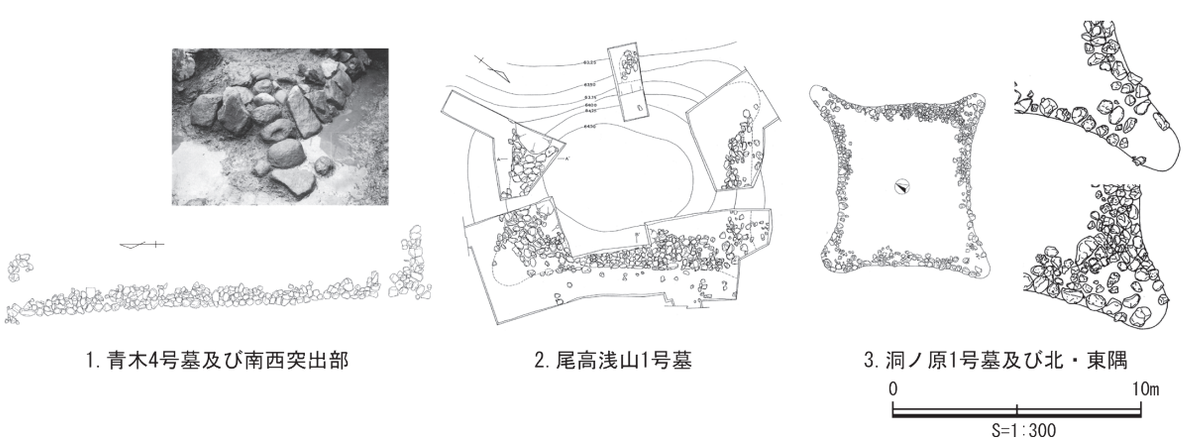


図５　沿岸部における中期後葉から後期初頭の四隅突出型墳丘墓

面図から立石と判断できるところもある。尾高浅山１号墓の後、四隅突出型墳丘墓は妻木晩田遺跡にある洞ノ原墳墓群に集中してみられるようになる。洞ノ原墳墓群の四隅突出型墳丘墓の突出部はどれも明確な角を持たず、先端部は丸みをもつⅡ類が採用されている。内部配石は、洞ノ原１号墓（松本哲2000）の北東隅に列石をもつ可能性を残すが、ほとんどは無秩序に内部を埋めるｂ類の配石であり（図５-３）、四隅突出型採用当初の西伯耆地域では平面形態がⅡ類に統一される。内部配石も考慮すると一部にⅡａ類採用の可能性がありながらもⅡｂ類が多数を占める。

以上、弥生時代中期後葉から後期初頭の四隅突出型墳丘墓の突出部についてみてきた。山間部の三次盆地の中で江ノ川上流域では貼石によって突出部を表現するⅠａ類、そのさらに上流で東に位置する西城川流域ではⅡｃ類と三次盆地の東西で突出部の様相が二者に分かれる。沿岸部では西出雲地域にⅠａ類が、西伯耆地域にはⅡｂ類が採用されていることがわかる。以上のような突出部の様子から、Ⅰａ類を採用する三次盆地の西側の江ノ川上流域と西出雲地域、Ⅱ類を採用する西城川流域と西伯耆地域の二つの交流ルートが想定できる。

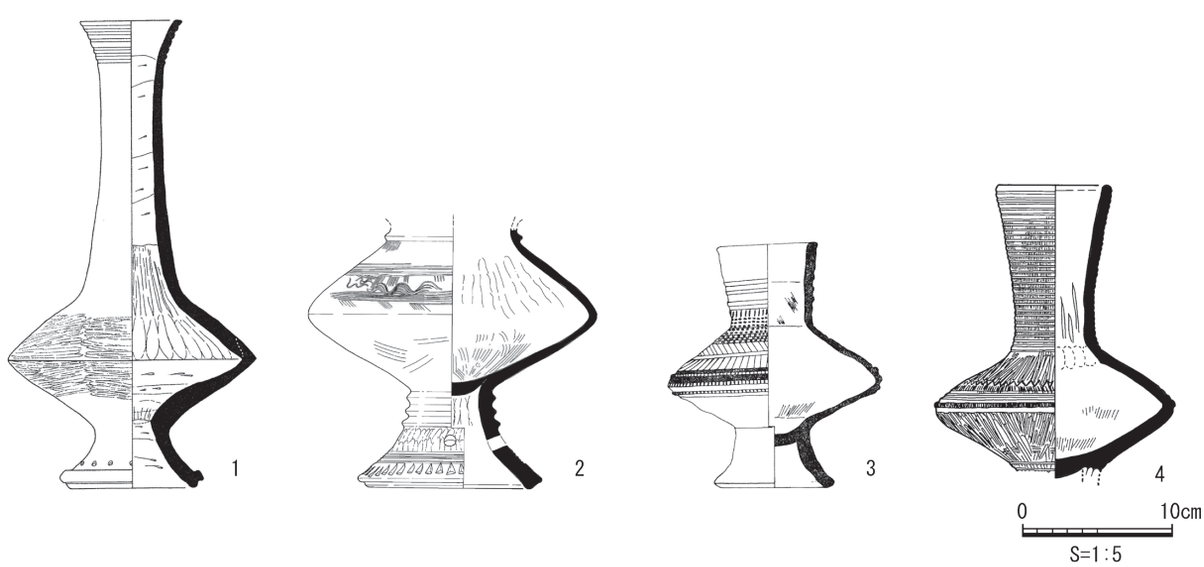
４－５．二つの脚付土器

上述した弥生時代中期後葉から後期初頭の四隅突出型墳丘墓の状況がどのような交流関係によって成立し、伝わったのかを明らかにするためにここでは二つの脚付土器を取り上げたい。

まず一つ目に取り上げるのは脚付長頸壺である。この土器は中期中葉から後期前葉に岡山県を中心に分布する土器であり、算盤型の胴部にのついた形をする（図６）。頸部の長さには長いものから短いものまで様々であるが、時期や地域による違いではない。脚部も長いものと短いものとあるが、これは時期によって長いものから次第に短くなることが指摘されている（村田2016）。四隅突出型墳丘墓の広がる広島・島根・鳥取三県では脚の短いものが多い。

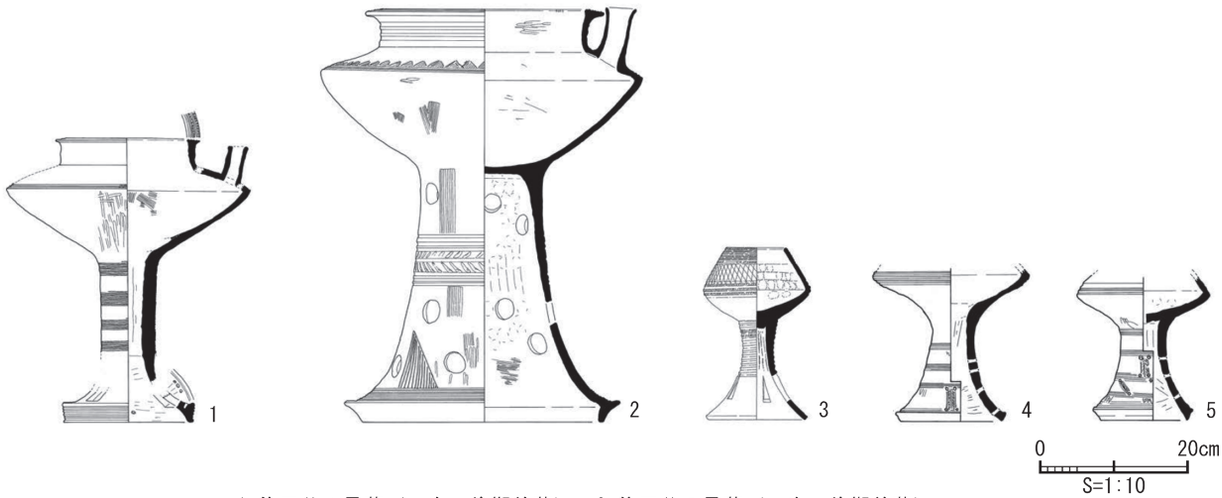
ここで着目をしたい点は、出土遺構の地域差である。出土遺構の傾向は地域によって大きく異なり、岡山・鳥取では集落遺跡から、広島・島根では墳墓からの出土が多い。岡山県以外の三地域では出土事例が少なく、明確な傾向を断言するには心許ないが、それぞれの地域で半数以上を占めるものがはっきりしていることは、当時の実態をそれなりに反映しているといえるだろう。四隅突出型墳丘墓のⅠａ類突出部を共有する三次と西出雲地の域はこの点においても共通性がみられる。また、同じ江ノ川の上流と下流に位置する広島県三次市塩町遺跡と島根県江津市波来浜遺跡（４で出土したものは文様や器形の類似性の高さが指摘されており（村田2016）、山間部と沿岸部の交流関係があったことがわかる。

二つ目に取り上げるのは脚台付鉢形土器（以下「脚付鉢」）である。脚付鉢は脚付長頸壷にやや遅れる中期後葉から後期前葉（妹尾1992:Ⅳ-１～Ⅴ-１）にかけて三次盆地を中心に分布する、高さのある脚台に鉢がのる形をした土器である（図７）。文様や分布から広島県山間部の中期後葉に比定される塩町式土器を構成する機種の一つと考えられている。脚付鉢とされるが、中には壷に近いものや注口のつくものなど本体部分のバリエーションに富んでいるのが特徴である。妹尾周三も述べているようにそれぞれを別に呼称することも可能だろうが、各要素の混在と文様の共通性か



1.佐田峠2号墓（三次・後期前葉）　2.青木遺跡（西出雲・中期後葉）　3.波来浜遺跡（石見・後期）
4.青谷上寺地遺跡（因幡・中期中葉～後葉）

図６　各地の脚付長頸壷



1. 佐田谷１号墓（三次・後期前葉）　2. 佐田谷３号墓（三次・後期前葉）
3. 宗祐池西１号墓（三次・中期後葉）　4. 5. 洞ノ原２号墓（西伯耆・後期前葉）

図７　四隅突出型墳丘墓における脚付鉢と小型脚付鉢の出土例

ら脚付鉢の名称の下で一括して扱う（妹尾 1992）。

脚付鉢は三次盆地を中心に岡山・広島・鳥取県に比較的多くみられる。島根・香川・徳島・山口県にも分布するが、前三県と比較すると数が少なく、山陰内部では西伯耆地域・東伯耆地域の沿岸部に多くみられる。同じ塩町式の甕の分布が広島から島根にかけて多く分布するにも関わらず、出雲地域側での出土例は内陸山間部の島根県奥出雲町国竹遺跡における１例しかない。同じ土器型式に含まれる土器の中で器種によって分布が大きく変わるのは興味深い。出土する遺構の性格は脚付長頸壷と似た様相を示し、広島県では墳墓からの出土が一定数確認されるが、岡山・鳥取では集落からの出土がほとんどである。数の少ない徳島県や香川県でも確実な墳墓出土例は確認されておらず、広島県での墳墓からの出土の多さが偶然ではなく、意識的な墓域での利用の結果であることがわかる。

山間部の墳墓では庄原市佐田峠３号墓・同市佐田谷１～３号墓・三次市殿山 38 号墓からの出土が確認されており、三次盆地の中でも西側の西城川流域の墳墓からの確認例が多い（図７- １・２）。また、大型の脚付鉢は鳥取県中部の東伯耆地域に分布が偏る。一方、小型の脚付鉢は宗祐池西遺跡で１個体、洞ノ原２号墓から４個体（脚部のみのものを１個体含む）が出土しており（図７- ３・４）、脚付鉢を墓域において積極的に用いるのは西城川流域と西伯耆地域、つまり突出部ではⅡ類を採用する地域と重なる。洞ノ原２号墓から出土した小型の脚付鉢は文様や器形から後期前葉ごろのものとされる。洞ノ原２号墓は方形貼石墓であるが、洞ノ原墳墓群は西伯耆地域に四隅突出型墳丘墓が最初に入ってくる地域であり、小型の脚付鉢は四隅突出型墳丘墓の情報と共に沿岸部へと伝わったとも考えられる。

４－６．小結

本章では中期中葉から後期前葉の四隅突出型墳丘墓について検討を行った。その結果、墳墓や土器の様相からすると沿岸部地域の中でも西出雲・西伯耆の二地域が中国山間部との交流をとりわけ積極的に行っていたことをうかがい知ることができた。

また、突出部の形態の分布と二つの脚付土器の様相をあわせて考えると隅に踏石状石列をもつⅠａ類を共有する三次西部・出雲地域の交流ルートと、突出部先端が先細りの丸になるⅡ類を共有し、小型の脚付鉢を墳墓に用いる西城川・西伯耆地域の交流ルートという二つの交流関係が背景に存在する可能性があることがわかった。

配石墓と方形貼石墓の分布の重なりや二つの脚付土器の様相は、山陰地方沿岸部から中国地方山間部の間の交流の活発さを示しており、相互に影響しあいながら四隅突出型墳丘墓が成立したという考えを裏付けるものともいえる。

５．四隅突出型墳丘墓の展開

四隅突出型墳丘墓は弥生時代後期中葉から後葉にかけて最も盛んに造営される。当該期の山陰地方の墳墓のあり方は地域によって大きく異なり、後期中葉の東西出雲は墳丘墓の確認例がほとんどなく、現在確認されている墳丘墓のほとんどが後期後葉以降の四隅突出型墳丘墓である。それに対して、東西伯耆地域及び因幡地域では後期前葉から中葉に墳丘墓が集中し、後期後葉は希薄となる。続く終末期は地域差が不明瞭になっていく。以下、その詳細について述べる。

５－１．後期中葉の四隅突出型墳丘墓

（１）三次盆地

初期の四隅突出型墳丘墓が多くみられた中国地方山

間部から述べる。Ⅰａ類が多くみられた三次西部の江ノ川流域では突出部の形がコの字形のⅢ類へと変化する。後期中葉は前段階と比べると例が乏しくなるが、広島県北広島町歳ノ神３・４号墓 (佐々木・向田ほか 1986) では突出部の貼石を垂直に立てて突出部をコの字形に囲む短小な突出部がみられる（図８- １・４）。突出部内部の配石は、貼石よりも小型の石材をランダムに配置して内部を埋めるⅢｂ類、あるいは配石を欠くⅢｃ類と判断できる。やや大型の石を垂直に立てることでコの字型の突出部を形成するあり方は江ノ川下流の沿岸部島根県邑南町順庵原１号墓（仁木・岩橋ほか 2007）でも採用されている。ただし、順庵原１号墓例では突出部は歳ノ神墳墓群と比べ長く、さらに上面に踏石状石列のあるⅢａ類となっている（図８- ３・５）。

一方、東部の西城川流域では前段階の江ノ川流域によくみられたように辺の貼石が突出部までは及ばず、隅に踏石状石列を伴うⅠａ類が田尻山１号墓（向田 1978）で確認されている（図８- ２）。西城川流域における後期中葉の四隅突出型はこの一例に限られる。

出現初期に多くの事例が確認された三次盆地では、後期中葉の上記数例を最後に四隅突出型墳丘墓が一度途絶える。

（２）西伯耆

沿岸部の中で最初にまとまって四隅突出型墳丘墓を造営した西伯耆地域では、洞ノ原墳墓群に引き続き妻木晩田遺跡内を中心に造営が続く。妻木晩田遺跡では洞ノ原地区から仙谷地区へと場所を移す。突出部のあり方は前段階から引き継がれるが、墳丘形態は変化し始める。仙谷墳墓群（松本哲 2000）は少し離れて存在する１号墓と隣接して一つの尾根に並ぶ２・３・５号（図９- １）と４・６・７号の三つの墳丘墓のまとまりとその周辺に伴う土壙墓から構成される。このうち四隅突出型と判断されるのは１・２号墓のみであり、そのほかは配石を伴う方形墓や配石のない台状墓が採用され、複数の墳丘墓形態が混在する。１号墓はやや小型であるが丸みのある先端の短い突出部を持ち、洞ノ原墳墓群のものに近い形をする（図９- ２）。また出土する土器も２号墓にやや先行し、仙谷墳墓群では最古段階、洞ノ原墳墓群と時期的にも最も近い。残存状況は悪く判断が難しいが、かろうじて確認できる南東隅はⅡｃ類、北東隅は貼石が突出部先端まで及ばないⅤ類にみえる。仙谷２号墓南東隅ではⅡｂ類の突出部が観察されている。妻木晩田遺跡から少し離れた所にある鳥取県米子市日下１号墓（小原 1992）は西伯耆地域の中で妻木晩田遺跡に含まれない四隅突出型墳丘墓の数少ない例である。こちらも残存状況が悪く突出部の形態を判断することは難しいが、測量図からは短小な突出部であることがわかる（図９- ３）。

当期の西伯耆地域の突出部の様子は前段階と同様に内部配石にはｂ類とｃ類が混在するが、平面形態はⅡ類が多くを占める。ただし、当期の西伯耆地域では仙谷墳墓群のように溝で区画するだけの台上墓と四隅突出型墳丘墓の両方が一つの墓域の中でも混在し、後述する東西出雲地域のように四隅突出型墳丘墓に限定される状況にはならない。

（３）東伯耆

東伯耆地域は後期中葉の鳥取県倉吉市阿弥大寺墳墓群にて初めて四隅突出型墳丘墓が採用される。阿弥大寺墳墓群（森下・真田 1982）は３基の四隅突出型墳丘墓とその周辺に伴う土壙墓から構成されている

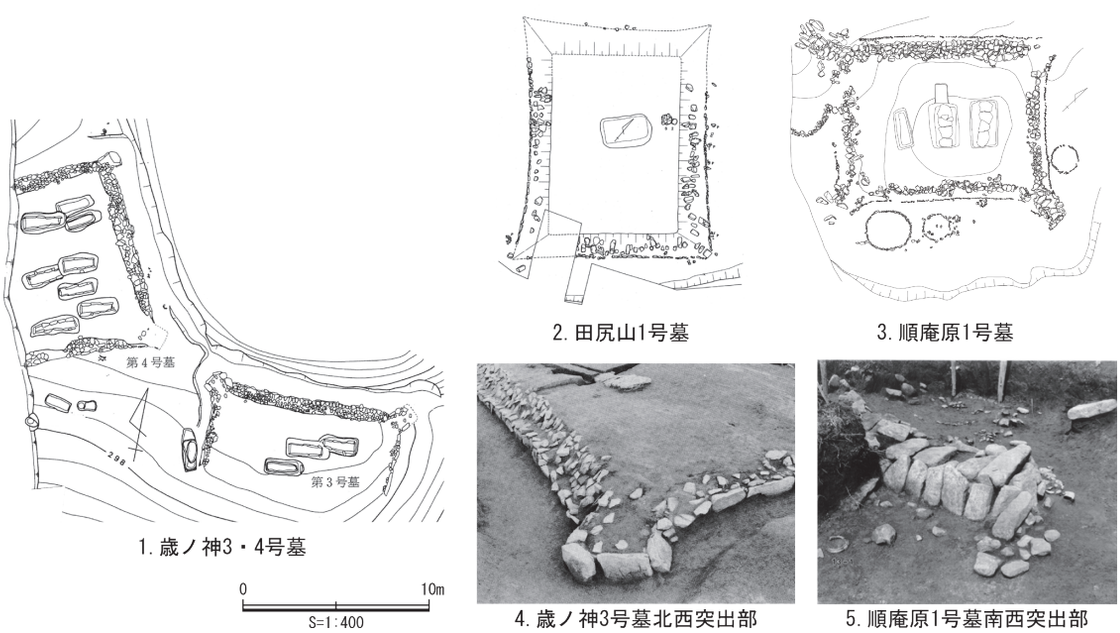
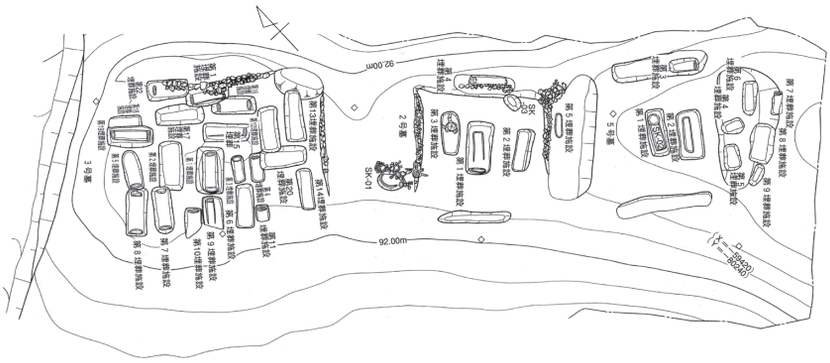
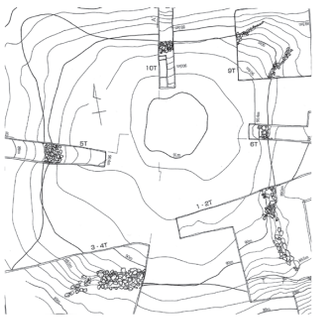


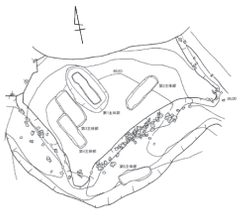
図８　三次盆地周辺における後期中葉の四隅突出型墳丘墓



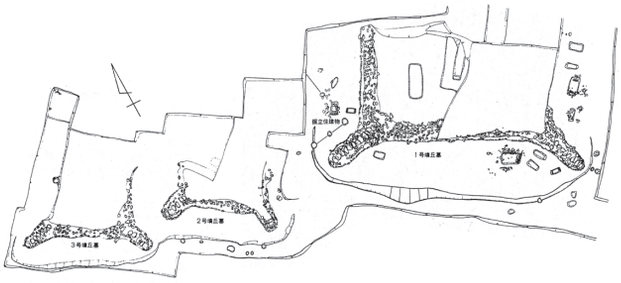
1. 仙谷３・２・５号墓



2. 仙谷１号墓

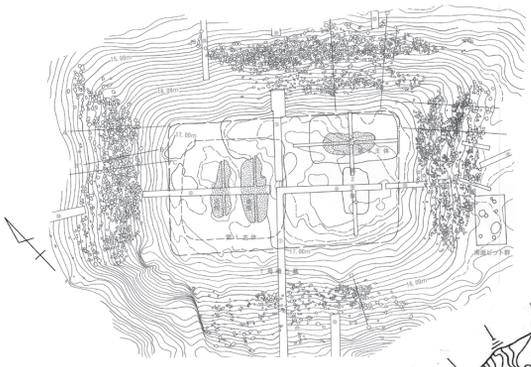


3. 日下１号墓

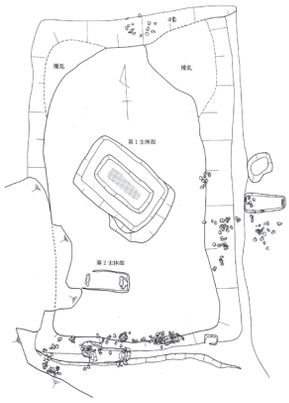


4. 阿弥大寺３・２・１号墓

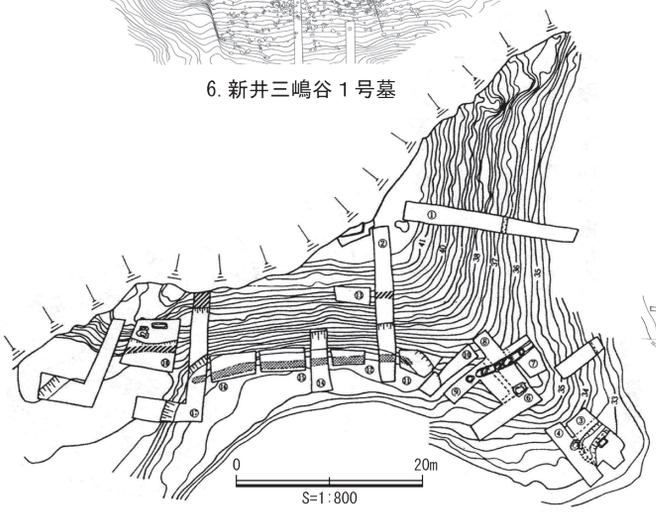
5. 柴栗墳丘



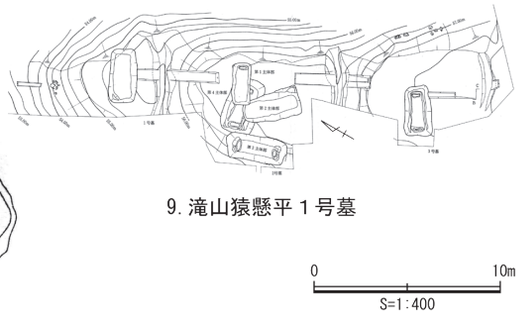
6. 新井三嶋谷１号墓



7. 布勢鶴指奥１号墓



8. 西桂見墳丘墓



9. 滝山猿懸平１号墓

図９　後期中葉の墳丘墓

（図９- ４）。規模は１号墓が最大であり、２・３号墓は１号墓より小さい。阿弥大寺墳墓群は調査区全体の北半分が削平を受けており、各墳墓とも南半分しか確認できない。残存状況の良い突出部をみると、先端が丸くなる突出部の内部に踏石状石列をもつⅡａ類となっている。規模は異なるが３基とも同じ突出部の構造をもっており、突出部の形に対する明確な意識の差がうかがえる。当墳墓群の最大の特徴は突出部がそれまでのものと比べて格段に伸びていることである。また踏石状石列の石材は他の石材よりも若干大きいものが採用されている。立石の石材の大小は選択されていないが、墳丘全体と突出部の先端まで巡らされている。

東伯耆地域では阿弥大寺墳墓群以外に確実な四隅突出型墳丘墓はない。鳥取県倉吉市柴栗墳丘墓（森下・根鈴ほか 1992）は阿弥大寺墳墓群と時期の近い後期中葉のもので、貼石を伴う墳墓であるとは確認できるが、残存状況が悪く詳しい状況の観察は難しい（図９- ５）。現状では辺がやや弧状になっているようにもみえ、報告者は四隅突出型墳丘墓の可能性も残すとしている。この柴栗墳丘墓を四隅突出型と認めるとしても東伯耆地域における四隅突出型墳丘墓は後期中葉のこの二例のみであり、継続性はない。

（４）因幡

山陰地方沿岸部の中で最も東に位置する因幡地域では長方形の墳丘をもつ方形貼石墓として鳥取県鳥取市布勢鶴指奥１号墓（中村徹・西浦ほか 1992）などがあるが（図９- ７）、明確な四隅突出型墳丘墓の例はない。四隅突出型の可能性のある例としては鳥取県岩美町新井三嶋谷１号墓（中野知・中野美 2001）、同鳥取市西桂見墳丘墓（平川 1982）がある。新井三嶋谷１号墓は方形の墳丘に四隅の部分を残すようにして貼石がみられる。この四隅の貼石の欠落は突出部を意識した結果ではあり、四隅突出型墳丘墓ではないかとされてきた墳丘墓である。しかし、同じように隅付近の貼石が欠ける佐田峠４号墓や洞ノ原墳墓群のように墳丘そのものに突出部をけずり出すなどの明確な突出部を示す痕跡はみられない（図９- ６）。もう一つの西桂見遺跡は因幡地域の中でも、さらに山陰地方全体の中でも特に異質な墳丘墓である（図９- ８）。調査が行われているのは南西側の一部のみで北西部分は土砂採取のために調査前に破壊されている。調査の行われた南東隅の地形が突出部のようにみえることから調査時は四隅突出型墳丘墓と報告された。その規模は突出部を含め一辺が 65m、高さは５ｍと報告され、これが四隅突出型墳丘墓であるならばこれまで確認されている中で最大の規模となる。ただ、墳丘裾の一部で貼石と立石が確認されているのみで突出部周辺の配石は確認されておらず、西桂見遺跡を四隅突出型墳丘墓とすることには異論もある（名越 1992, 松井 1996）。筆者も四隅突出型墳丘墓であるかについては否定的である。一方で外来系の大型の土器が目立つなど、西谷３号墓を想起させる部分もあり、後期中葉末の因幡地域に大きな力をもつた集団・人物が存在したことは認められるだろう。

上記のような大型の方形貼石墓がみられる一方、因幡地域では丘陵斜面を利用した台状墓が複数みられる。鳥取県鳥取市滝山猿懸平１号墓（前田 2000）（図９- ９）や同郡家町下坂１号墓（中野 1990）では丘陵斜面に段々状の平坦面を削り出すタイプの台状墓が採用されている。このタイプの台状墓は因幡地域の東に隣接する丹後半島によくみられる形態であり、因幡地域と丹後地域との結びつきの強さがうかがえる。

（５）東西出雲

東西伯耆地域や因幡地域の後期中葉はそれぞれの地域において異なる墳丘墓の形態がみられるが、四隅突出型墳丘墓の突出部においてはそれぞれの地域の特徴がみられる。ところが同じ時期に東西出雲地域に目を向けてみると、この段階に位置付けられる墳丘墓の例はほとんどない。中期後葉にⅠａ類の四隅突出型墳丘墓の確認された西出雲地域の青木遺跡もこの段階の墳丘墓は確認されておらず、唯一確認されているのは島根県安来市九重３号墓（内田・東森ほか 1966）のみである。その九重３号墓も調査時に土壙墓として認識されていたため、墳丘についての詳細な調査はされておらず、確実に墳丘墓であるとは言えない。

５－２．後期後葉の四隅突出型墳丘墓

弥生時代後期後葉になるとそれまでに多くの墳丘墓がみられた東西伯耆地域及び因幡地域では、四隅突出型墳丘墓を含め、墳丘墓そのものの事例が希薄になる。

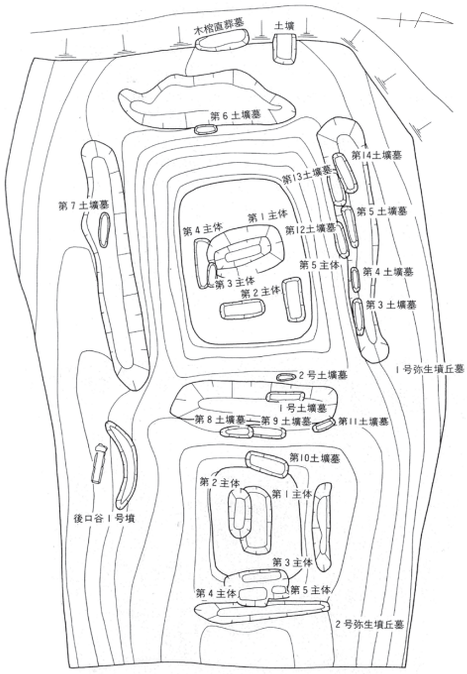
（１）西伯耆

西伯耆地域では後期中葉に造営の開始した仙谷墳墓群において後期後葉とされる５号墓が確認される程度となる。この仙谷５号墓は四隅を掘り残し、各辺の外側にそれぞれ溝を作ることで区画される、貼石を持たない台状墓である（松本哲 200b）。

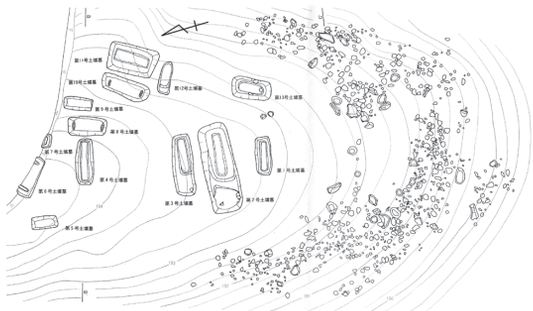
仙谷５号墓の他に後期後葉に位置付けられる墳丘墓はなく、西伯耆地域では四隅突出型墳丘墓に限らず、墳丘墓のそのものがみられなくなる。

（２）東伯耆

東伯耆地域では後期中葉の阿弥大寺墳墓群に続く四隅突出型墳丘墓がなく、後期後葉では台状墓が多く採用されるようになる。鳥取県倉吉市大谷・後口谷墳墓群（森下 1986）では２基の墳丘墓が並んでみられ、墳丘同士の間や辺に沿って溝が掘られている（図 10- １）。その溝は四隅の部分を掘り残しており、また全



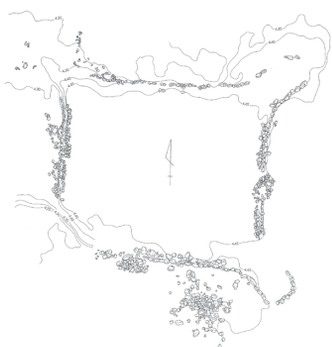
1. 大谷・後口谷墳墓群



2. 泰久寺１号墓

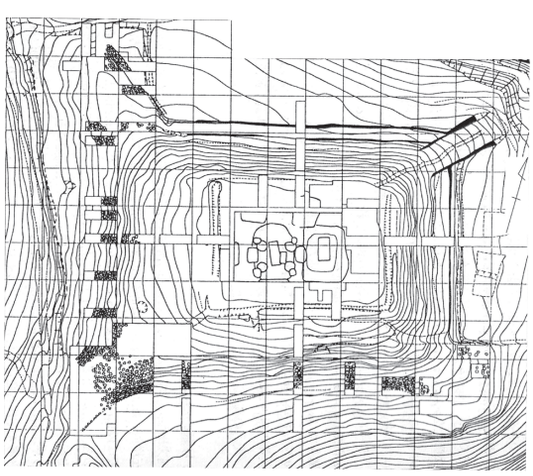
0 10m
S=1:400

3. 青木１号墓



4. 中野美保１号墓

0 10m
S=1:400



5. 西谷３号墓

0 20m
S=1:800

6. 西谷３号墓南西突出部

0 5m
S=1:200

図 10　後期後葉の墳丘墓（1）

ての辺に必ずあるわけではない。このほか、因幡地域の滝山猿懸平墳墓群と同様、丘陵斜面に段々畑のように平坦面を作り出す鳥取県倉吉市泰久寺墳丘墓（日野・田中 1984）など東からの影響が強くなる。泰久寺墳丘墓では墳丘斜面に貼石を施しているのが確認でき、東からの影響が強くなる中でも、前段階から続く貼石の影響も残っていることがわかる。

（2）西出雲

後期後葉に盛んに四隅突出型を採用し、大型化を進めたのは東西出雲地域である。両地域において四隅突出型墳丘墓は各地に点在するのではなく、各平野の中で特定の場所に集中して造営される。

中期後葉にⅠａ類の突出部をもつ青木４号墓がみられた西出雲地域も後期中葉は墳丘墓の空白期を経て、後葉段階に西谷３号墓のある西谷丘陵の大型四隅突出型墳丘墓を代表に、島根県出雲市青木遺跡や同市中野美保遺跡など低地にも四隅突出型墳丘墓がみられる。空白期ののち、四隅突出型墳丘墓が先に採用されるのは平野部である。平野部のものは一辺が 15m 以下の中型のものに限られる。青木１号墓（今岡 2006）の突出部はコの字形の平面形態を持ち、内部を埋めるように配石がされる。突出部内部の配石は、南西・北東突出部では突出部の中心に踏石状石列のように見える石列があるが、南東突出部ではそれがみられず、一つの墳丘墓にⅢａ類とⅢｂ類が混在している（図 10- ３）。青木遺跡と同様、中野美保１号墓（仁木 2004）でもコの字形に突出部がのびるⅢ類が採用されている。中野美保１号墓では墳丘墓全体を縁取るように配石され、突出部の内部にも配石はなく、Ⅲｃ類となっている（図 10- ４）。

西谷３号墓をはじめ後葉段階に規模が格段に大型化し、一辺が 30 ～ 40m に至るものが出てくる。しかし、その突出部には平野部の中型のものと同じⅢ類が採用されている。島根県出雲市西谷墳墓群は弥生時代後期後葉に造営が始まる墳墓群である。西谷３号墓（渡辺 1992；渡辺・坂本 2015）は突出部内部に配石されるが、踏石状石列はないことからⅢｃ類と判断できる（図 10- ５・６）。西谷２号墓（渡辺・坂本 2006）でもⅢｃ類が採用されている。これら大型墳丘墓の突出部に踏石状石列がないのは突出部に対する意識の変化というよりも、墳丘の大型化によって突出部の幅が広くなったことによるものと考えられる。

以上のように西出雲地域では踏石状石列の有無の違いはあるが、平野部の小型・中型の墳丘墓、丘陵上の大型の墳丘墓の平面形態はともにコの字形であり、墳丘の規模に関わらず突出部はⅢ類に統一される。

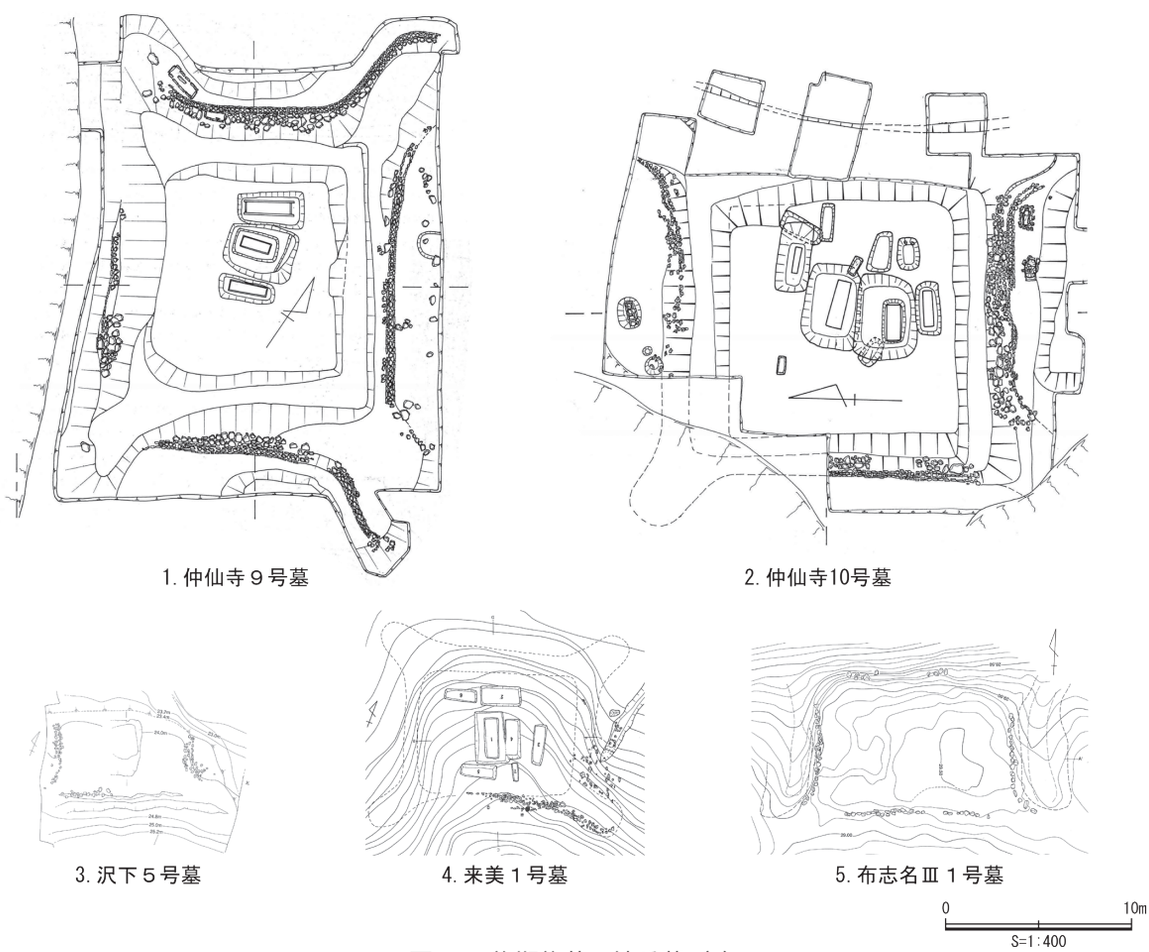


図 11　後期後葉の墳丘墓（2）

（3）東出雲

東出雲地域では飯梨川流域の荒島丘陵と松江平野に分布のまとまりがある。

伯太川・飯梨川下流域にある荒島丘陵には後期後葉から終末期にかけて大型の墳丘墓が集中する。荒島丘陵に造営された墳丘墓のうち後期後葉段階とされる島根県安来市仲仙寺墳墓群（近藤 1972）では 9・10 号の 2 基の四隅突出型墳丘墓であるとわかっている[5)]。9・10 号の突出部は先端が基部よりも幅広な袋状の平面形態をもち、突出部の内面に貼石のないⅣc 類であり、墳丘裾には二段の立石がみられる（図 11-1・2）。このⅣc 類突出部は終末期後半の宮山Ⅳ号墓にも引き継がれ、基部に対する先端部の幅の広さが次第に明確になる。

一方の松江平野では大型の墳丘墓はなく、小・中規模の墳丘墓に限られる。松江平野の墳丘墓の特徴は島根県松江市沢下 5 号墓（椿・伊藤ほか 2008）や同市布志名大谷 1 号墓（名越・錦田 2001）のように配石が希薄で、縁辺部の貼石が四隅付近において外側に開くが、先端までは配石の巡らないⅤc 類が採用されていることである（図 11- 3・5）。ただし、松江平野にみられる墳丘墓の全てがⅤ類に限定されるわけではない。島根県松江市来美 1 号墓と同市間内越 1 号墓では短小なⅡ類突出部の先端まで配石がみられる。来美 1 号墓は残存状況が悪いため墳丘全体の貼石は確認できないが（図 11- 4）、次節で述べる終末期の間内越 1 号墓では墳丘全体に貼石が確認されている。報告者は立地・時期がともに近いことに加え、突出部形態も類似することからから来美 1 号墓も本来は斜面全体に貼石があった可能性が高いとしている（中尾・今岡ほか 1989）。

5－3．終末期の四隅突出型墳丘墓

東西伯耆地域では後期前葉から中葉にかけて、東西出雲地域では後期後葉に四隅突出型墳丘墓採用され、その突出部は地域ごとに異なっていた。この突出部の地域性は終末期になると大きく変化する。

後期後葉に墳墓がみられなくなってしまっていた西伯耆地域では終末期に突如として鳥取県溝口町父原墳墓群 (長田 2017) において四隅突出型墳丘墓が復活する。父原墳墓群では 2 基の四隅突出型墳丘墓が隣り合って確認されている（図 13- 1）。1 号墓は貼石をもつが、2 号墓は配石が全くない。貼石をもつ 1 号墓は突出部が短く、先端が丸いⅡ類突出部が採用されている。全く同じではないものの、丸みのある短い突出部は後期前葉の洞ノ原墳墓群のものと共通する。続く終末期の後半には鳥取県大山町徳楽墳丘墓がある (湯村 2017b)。徳楽墳丘墓は竹管文のある特徴的な土器が出土しており、終末期の後半、古墳時代の直前とされている。徳楽墳丘墓は南西隅がややいびつに伸び、墳丘斜面における礫の散乱が認められることから四隅突出型の可能性が指摘されており（松井 1996）、西伯耆地域にも終末期後半のⅤ類の突出部をもつ四隅突出型墳丘墓が採用されていた可能性がある（図 13- 2）。

東伯耆地域及び因幡地域においても貼石・突出部を墳丘墓が終末期の後半に確認されている。鳥取県倉吉市藤和墳丘墓（湯村 2017a）は、調査後に正式な報告は行われておらず遺物等の詳細は不明であるが、写真資料で確認する限りではⅤ類、あるいは短小なⅡ類突出部とみられる。後期中葉の阿弥大寺墳墓群以降、途切れていた四隅突出型墳丘墓が終末期に造営されたことを示す重要な例である。鳥取県鳥取市糸谷 1 号墓（森・松藤 1994）は各辺に貼石をもつ墳墓である。残存状況が悪く詳細な配石構造は推測し得ない。現状では配石が突出部を囲むようにはみえず、辺が弧状に開くⅤ類突出部の四隅突出型墳丘墓の可能性が高い（図 13- 3）。

後期後葉に大型の四隅突出型墳丘墓を確立させた出雲地域では、他の地域と同じように突出部表現が曖昧なものと、後期後葉以降の地域性の明確な突出部をもつものの両方がみられる。荒島丘陵の安養寺墳墓群（出雲考古学研究会 1985）では、斜面の貼石・立石にそれまでの要素が引き継ぎながらもⅣ類突出部は採用されず、辺を弧状に開かせるのみのⅤ類となっている（図 13- 4）。一方、島根県安来市宮山Ⅳ号墓（松本岩 2003）は荒島丘陵墳墓群の中で安養寺墳墓群に後出し、終末期後半に位置付けられるものであるが、その突出部は仲仙寺墳墓群と同様、袋状の突出部を墳裾の立石と貼石のみで囲み、内部の配石を伴わないⅣc 類を採用している（図 13- 5）。安養寺墳墓群で一度は突出部の表現を曖昧にしたのち、後期後葉と同様の形の突出部を再び選択したことになる。安養寺 1 号

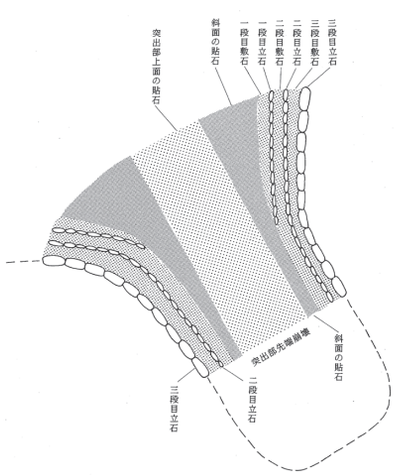
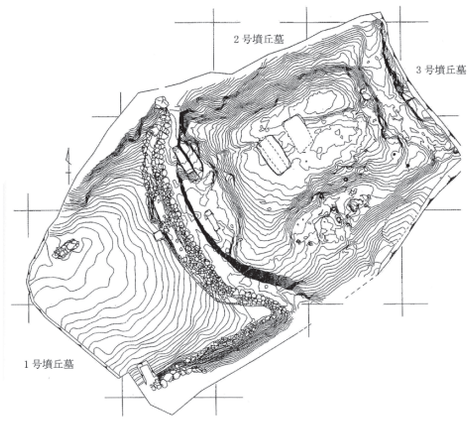
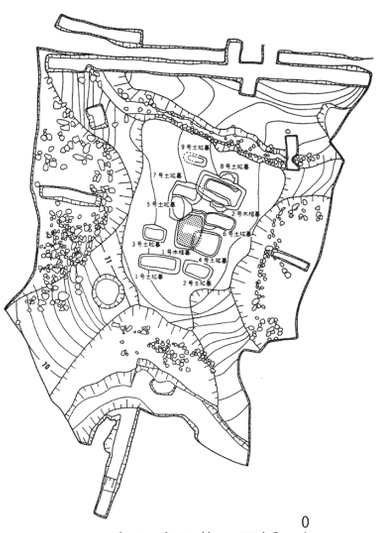


図 12　西谷 9 号墓突出部模式図

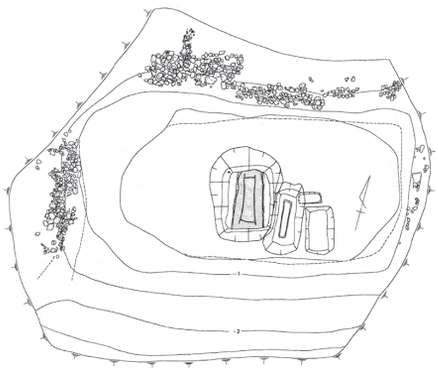


1. 父原１・２号墓（西伯耆）

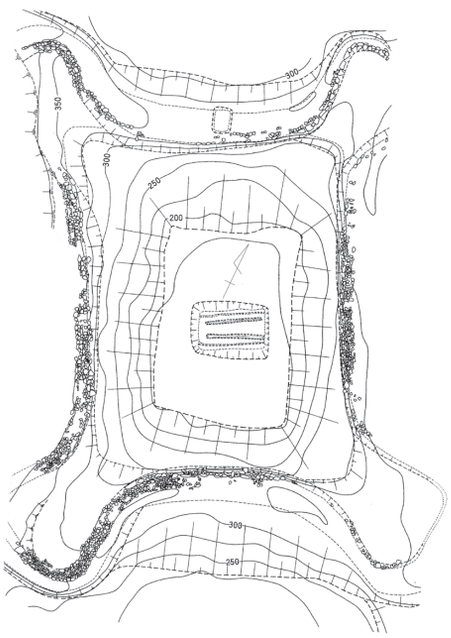
2. 徳楽墳丘墓（西伯耆）



3. 糸谷墳丘墓（因幡）



4. 安養寺１号墓（西出雲）



5. 宮山Ⅳ号墓（西出雲）

0　10m
S=1:400

図 13　各地における終末期の墳丘墓

表２　墳丘墓の編年と突出部の類型　（アミカケ：四隅突出型　ゴシック：貼石を持つもの）

		江ノ川流域			島根県			鳥取県		
		中国山間部			西出雲	東出雲		西伯耆	東伯耆	因幡
		三次	西城川	石見	出雲平野	松江平野	安来平野			
中期	前葉			波来浜A区						
	中葉				中野美保2					
	後葉	宗祐池西 Ⅰa 陣山1～5 Ⅰa 殿山38 Ⅰa	佐田峠4 Ⅱc		青木4 Ⅰa					
後期	前葉		佐田谷1 ？ 田尻山 Ⅰa	波来浜B1・2 波来浜B3				尾高浅山 Ⅱb 洞ノ原2 洞ノ原1 Ⅱb 洞ノ原9 Ⅱb 洞ノ原9 Ⅱb		新井三島谷 松原1 滝山猿懸２
	中葉	歳の神3・4 Ⅲb		順庵原1 Ⅲa		九重３ 沢下5号墓 Ⅴc		仙谷2 Ⅱb 仙谷１ 日下1 Ⅱb	阿弥大寺1～3 Ⅱa 柴栗	滝山猿懸１ 下坂１ 門上谷 布施鶴指奥1 西桂見
	後葉				中野美保1 Ⅲb 青木1号墓 Ⅲa 西谷3・2 Ⅲc	的場 布志名大谷3 Ⅴ 来美1 Ⅱb カウカツE-1 Ⅱ?c	仲仙寺9・10 Ⅳb 長曽		大谷後ロ谷 宮内1 泰久寺	
終末期		矢谷MD1 Ⅲc			西谷4 Ⅲc 西谷6 Ⅲc 西谷9 Ⅲc	沢下6号墓 Ⅴc 鍵尾 間内越 Ⅱb	安養寺1 Ⅴc 安養寺3 ？ 宮山Ⅳ Ⅳc	父原１・２ Ⅱb 三度舞大将塚 徳楽 Ⅴ?	藤和 Ⅴ	糸谷 Ⅴc

墓と宮山４号墓の墳丘裾の配石構造はよく類似しており、両墳墓は同一集団の元に造営されたとみられ、両墳墓の突出部の違いには大きな意味があるといえる。そして、西出雲地域では最後の四隅突出型墳丘墓である出雲市西谷９号墓（坂本 2006）まで、突出部表現が曖昧なⅤ類突出部は一貫して採用されなかった。西谷９号墓は後世の壊変が大きく、突出部の全体はわからないが、現存する部分からは突出部の先端で立石の段数が減少する形が確認されている。このような立石の構造は他にはなく、突出部への意識の強さと独自の発展が進んでいたことがうかがえる（図 12）。

以上から、終末期には各地でⅤ類突出部が採用され、斉一性がみられはじめる。一方で東西出雲地域、特に西出雲地域では後期後葉から続く形の突出部を選択していることから、四隅突出型及び独自の突出部を採用することを強く意識していたことがわかる。

５－４．小結

前章と本章において山陰地方の四隅突出型を中心とした墳丘墓について検討を行ってきた。それら墳丘墓と突出部の分類をまとめたものが表２である。

四隅突出型墳丘墓は中期後葉の山間部と西出雲地域の交流の中で成立し、後期前葉には西伯耆地域にもその分布を広げる。この段階では踏石状石列をもつⅠa 類と突出部を削り出し、先端が楕円になるⅡ類の２類型がみられた。

後期中葉の段階には江ノ川上流域の歳ノ神遺跡において、立石で突出部を囲み、短小な方形のⅢｃ類の突出部がみられた。この例ののちほとんどの突出部が立石で完全に囲まれるようになる。さらに、順庵原１号墓や阿弥大寺墳墓群ではそれまでのものと比べて突出部が長く伸びるようになった。加えて、この頃から突出部の地域ごとの特徴が明確になり始めた。

後期後葉の西出雲地域では長方形にまっすぐ伸びるⅢｂ類、東出雲地域の安来平野では袋状で内部配石を伴わないⅣｂ類、その間に挟まれた松江平野は辺の貼石が弧状に開くのみのⅤｃ類がみられる、とそれぞれの平野の特徴が明瞭となる。この地域性は突出部の形のみならず墳丘墓そのものの側面にもみられる。西伯耆地域では後期中葉の段階で方形墓と四隅突出型墳丘墓が並存し、後期後葉では墳墓そのものが希薄になる。東伯耆地域では阿弥大寺墳墓群の後、四隅突出型が続かず後期後葉まで方形墳を採用、因幡地域では方形貼石墓と台状墓が入り混じり、丹後地域の要素が濃い。出雲地域では後期前葉・中葉が墳墓の空白期間となり、後期後葉に各平野で一斉に多くの四隅突出型墳丘墓がみられるようになる。

後期後葉までの様相に対して、終末期の後半には各地で突出部表現の曖昧なⅤ類突出部の四隅突出型墳丘墓が揃って採用され、地域差が不明瞭になる。その中、西谷９号墓や宮山Ⅳ号墓では後期後葉と同じ、その地域の突出部形態を維持する点には注意が必要であるが、それまでの四隅突出型墳丘墓が全地域で重なることはなかった状況に対する、この終末期の共通性の高さは重要な意味をもつと考えられる。

６．器台の地域性

６－１．器台形土器

前章までは墳丘墓に焦点を当て、その地域差を指摘した。本章では、弥生時代後半期の地域性について土器の側面から検討する。その材料として本論では器台形土器を取り上げる。

器台形土器（以下、「器台」）は九州を除いた西日本の広い範囲で弥生時代中期中葉末から中期後葉初頭ごろに出現し、壷や甕などの土器を載せる機能を担っていたとされている土器である。また、器種構成比率に占める割合が低く、上に乗せた土器を高く捧げる祭祀場面での役割を果たしたと考えられる（大橋 1992）。器台は山陰地方の墳丘墓から出土する土器の中でも甕についで出土数が多い。さらに、佐原真は器台について、「農耕祭祀の発達と階級社会の萌芽に関わる器種」とも述べている（佐原 1976）。以上から、器台の出現が当時の社会変化と墳丘墓の発達に深く関わっていることが予想されるため、今回の検討対象として器台を選択した。

６－２．器台の地域性

（１）東西出雲

突出部の形態からは平野ごとに違いがみられた出雲地域であるが、器台からは東西出雲地域の中で違いはみられなかったため、両地域を合わせて一つの単位として検討を進めていく。出雲地域ではどの時期においても集落から出土するものと墳墓から出土するものの間に器形・文様の両側面において明確な差はない。

出雲地域の中期後葉段階は山陽地方からの影響が濃くみられる。この段階のものは筒部にスカシが入り、脚端及び筒部に凹線が入る。脚端部は稜を境に内側に屈折するものが多くみられる（図 14- １・２）。この内側に屈折する脚端部は吉備地域の器台や塩町式土器の脚付き土器の脚部にもみられ、中期後葉の中国地方に一般的な形である。

後期中葉ごろに外側に開く脚端部をもつものが出現する（図 14- ４・５）。後期中葉段階のものは受部及び脚端部が垂直よりもやや外反し、外面に凹線をもつ。加えて、受部・脚端の幅がわずかに大きくなる。しかし、全体に対する口縁・脚部と筒部の割合を比較すると筒部の割合が圧倒的に大きい。筒部の施文の要素は、縦に細長いスカシと２～３条を一単位とする凹線の二つに集約される。九重３号墓から出土したものは筒部中央に２～３条の凹線と縦に細長いスカシをもち、後期前葉の要素をよく残している例である（図 14- ９）。後期中葉には脚端部が外側に開くようになることに加え、筒部に羽状文を施す例が少しずつみられるようになる（図 14- ６）。

後期後葉になると受部及び脚端部の幅が広くなり、外面の凹線も浅くなり、細い擬凹線へと変化する。それにより、器高全体に占める口縁・脚部の割合が大きくなり筒部の割合は小さくなっていく。ただし、この段階においては筒部の収縮がまだ弱く、全体の高さはそれまでと大きく変わらない（図 14- ７）。筒部の施文も凹線ではなく羽状文を用いるものが多数を占めるようになる。羽状文は貝殻の腹縁押し当てることによって施文するものであり、この貝殻羽状文が出雲地域の器台の大きな特徴である。羽状文には上下に数条の横線を伴うものや二段となるものなど羽状文を用いた中でのバリエーションが認められる。また、羽状文の代わりにノの字文を施すものも多数みられる。

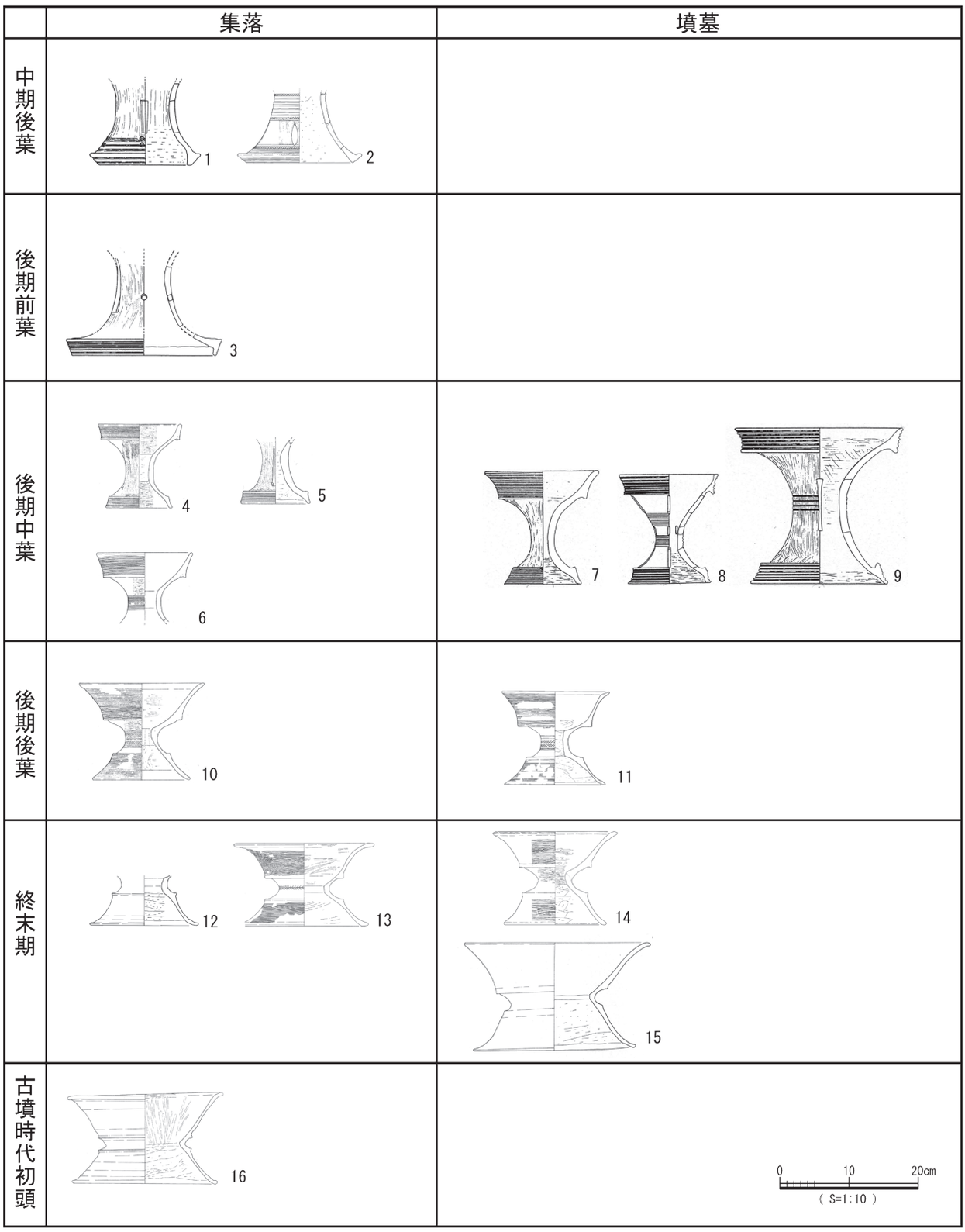
続く終末期には、受部・脚端部の幅はほとんど変化しないが、筒部の収縮が進行することにより器形全体が扁平な形へと変化していく。また口縁・脚部外面の凹線や羽状文など施文そのものが減少し、無文化が進行する。終末期の前半までは筒部の施文がないものが増えつつも、筒部の幅に合わせ羽状文の幅を狭くあるいは上半のみにすることで施文を維持するものが残る（図 14-13）。終末期の後半にはさらに扁平化が進み、筒部の断面の形状は「く」の字形にまで至り、筒部の施文は完全になくなる（図 14-15）。

（２）西伯耆

西伯耆地域における器台の大きな特徴は鼓形器台と異なる系譜をもつ大型器台の存在にある。この大型器台は中期後葉の青木遺跡出土例を初現とし、後述する東伯耆地域に特徴的な東伯耆型大型器台とともに西伯耆型大型器台とされるものである（松井 2015）。

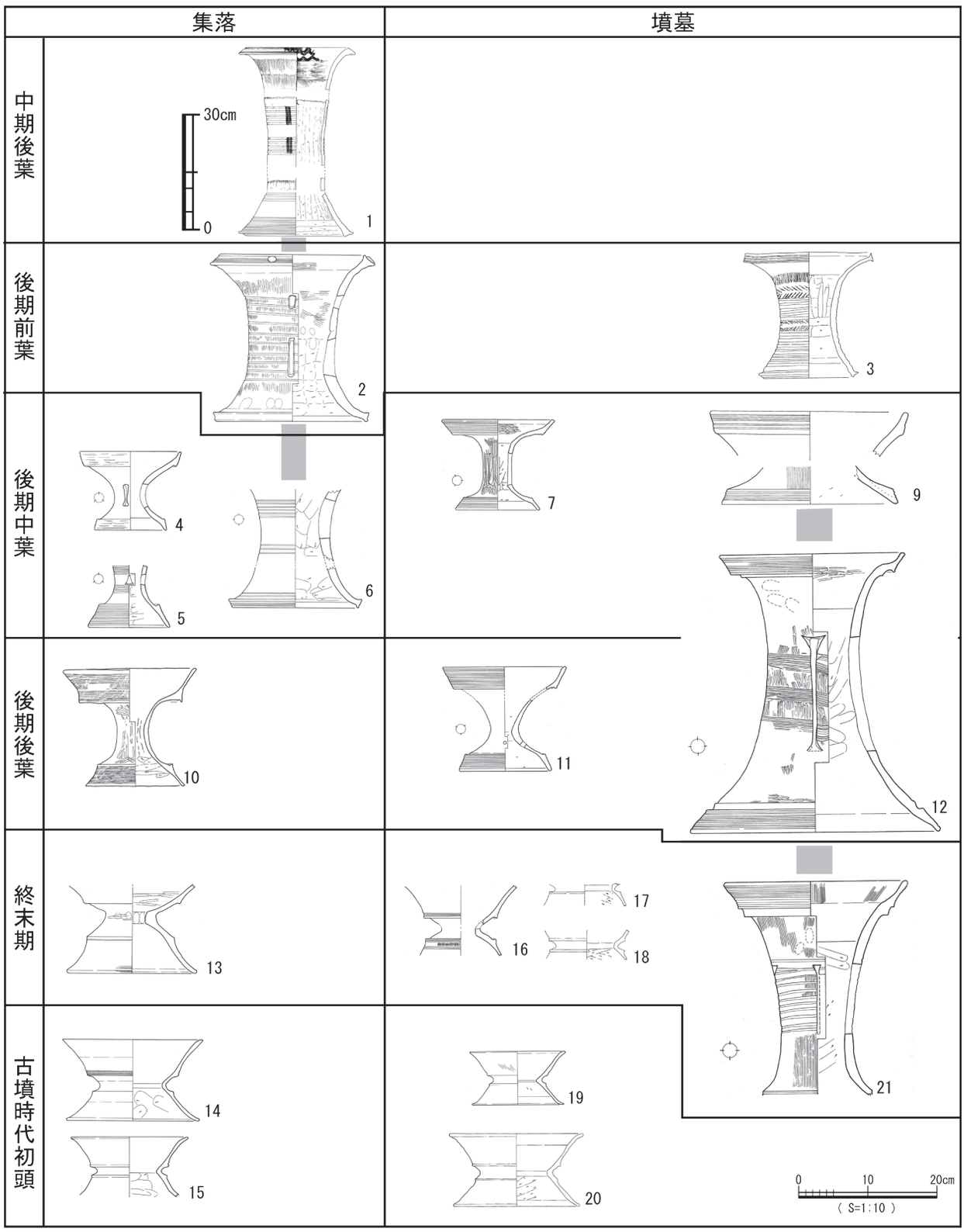
西伯耆型の大型器台は縦に長く伸び、筒部には凹線が入るものが多い。また両端に角をもち凹レンズを縦に長く引き伸ばしたようなスカシをもつことが特徴である。60cm を超えるようなものもみられ、東伯耆地域の大型器台よりも高さがある。このような大型の器台は山陰地方の他のどの地域にもみられず、西伯耆地域の大きな特徴である。後期中葉の青木遺跡出土の大型器台では出雲地域の中期後葉のものと同様に凹線をもつ端部が内側に屈折し、稜がはっきりとしているのがわかる（図 15- １）。この青木遺跡から出土した大型器台は筒部の凹線や脚端の形状に吉備からの影響が強くみられるとされている（船越・諸田ほか 1978）。

後期中葉に口縁及び脚端が外側に開くものがあらわれ、外面には櫛描沈線が施される（図 15- ９）。これは甕や鼓形器台の櫛描沈線と同じ施文方法であり、次第に在地化が進んでいることを示す。筒部の施文は凹線をもつものが圧倒的に多い。西伯耆地域では大型器台もそのほかの器台も数条単位の凹線を繰り返す、一条ずつ引くなど、筒部の施文は凹線の引き方の範囲内に限られる（図 15- ２・５・6）。口縁部及び脚端部は後期前葉までと比べるとやや幅は広くなるものの拡張方向への顕著な変化は認められない（図 15-12）。筒部のスカシはあるものとないものの両者がある。後期後葉に筒部には長方形とその両端あるいは一方に三角形を組み合わせたような特徴的な形のスカシがみら



1:がらんさん遺跡　2:石台遺跡　3:九重5号墓　4・5・6・10・13・14:山持遺跡　7・8・9:九重3号墓　11:西谷3号墓　12:草田遺跡　14:鍵尾遺跡　15:安養寺1号墓

図 14　出雲における器台の変遷



1:青木遺跡　3:尾高浅山1号墓　2・4・5・6・10・13・14・15:妻木晩田遺跡 7:仙谷2号墓　8・9:日下1号墓　11・12・21:仙谷5号墓　16:仙谷4号墓　17・18：父原1号墓　19:松尾頭2号墓 20:徳楽墳丘墓

図 15　西伯耆における器台の変遷

れる（図 15-12・21）。

大型器台は当初、集落遺跡から出土する傾向があったが、後期中葉に墳墓からの出土が認められるようになるにつれて集落からの出土は減少し、墳墓において利用される土器へとその性格を変化させる。これら大型器台の存在は西伯耆地域の大きな特徴だが、量的な側面から考えると大型器台と鼓形器台とでは後者の方が広く一般的に利用されていたと考えられる。

西伯耆地域において鼓形器台の系譜に連なるものがみられるのは後期中葉の段階以降である。出現段階で既に脚端が外側に開いており、筒部には数条の凹線と三角や隅丸長方形のスカシが入る（図 15- 4・5・7）。

後期後葉に入ってからも西伯耆地域では受部及び脚部の拡張とそれに伴う筒部の収縮があまり進まず、前段階と同じ筒部の長い形のものが多くみられる[7]（図 15-10）。筒部の施文やスカシは希薄である。

後期後葉から終末期前半に位置付けられ、脚部外面の稜付近に凹線文とスタンプ文をもつ土器が妻木晩田遺跡で確認されている。スタンプ文は因幡地域によくみられる特徴である。この妻木晩田遺跡出土の例は胎土が大山周辺に特徴的な橙の強い色調であることに加え、スタンプ文が因幡地域のものと比べると簡素な作りになっていることから因幡地域の影響を受けて西伯耆地域で生産されたものと考えられる[8]。

終末期になると筒部の収縮は一気に進行し、わずかに筒部の幅が広いものもあるが、ほとんどは断面が「く」の字に近い形へと変わり、全体として扁平な形になる。受部･脚部外面の擬凹線はなく無文となる（図 15-13・18）。

全期を通じて凹線以外の施文がないこと、後期後葉における筒部収縮の遅れが西伯耆地域の鼓形器台の特徴として挙げることができる。

（3）東伯耆

東伯耆地域も西伯耆地域と同様に、鼓形器台が一般的な器台として存在しながら、東伯耆地域特有の大型の器台がそこに加わる。

東伯耆地域では後期前葉に口縁に鋸歯文をもち、筒部に凹線が施された山陽系の器台が確認されている（図 16- 1）。その後、鼓形器台が見られるようになるのは後期中葉に入ってからである。筒部には凹線が施文されるものが多い（図 16-2・3）。筒部のスカシは必ずあるものではないが､スカシをもつ場合は三角形、あるいは隅丸長方形となる（図 16- 3）。受部及び脚部外面には擬凹線が施される。

後期後葉には鼓形器台の筒部の施文やスカシはみられなくなる。反対に受・脚部外面には擬凹線に加えて波状文が施されるようになる。器形は口縁・脚部の幅が広くなり､筒部は次第に収縮していく（図 16- 6）。波状文は受・脚部にそれぞれ一段か二段施されるが、二段のものが多数である。中には櫛描沈線の後に波状文を引き、さらに波状文に加えて円形の刺突文を組み合わせるものもある。また波状文の振幅にも大きいものと小さいものがあり、波状文の施文の中にもバリエーションがみられる。

終末期に入ると筒部の収縮はさらに進行し、次第に断面が「く」の字形へと近づいていく。外面の擬凹線と波状文は終末期の前半までは残るが、終末期の後半には共に姿を消す（図 16-10・11）。

続いて東伯耆型大型器台について述べる。東伯耆型大型器台は西伯耆地域のものと比べるとやや小さい。鼓形器台の出現と同じ後期中葉の水溜り・駕籠据場遺跡出土例が現在確認されているものの中でもっとも古く位置付けられている。水溜り・駕籠据場遺跡のものは、筒部中央に幅広く凹線文が引かれ、そこに重なって縦に長い鋭角の三角形の透かしが上下交互の向きに入る。受・脚部端はわずかに外反し、外面には凹線が引かれたのち三本を一単位とした縦向きの凹線が重ねられている（図 16- 4）。

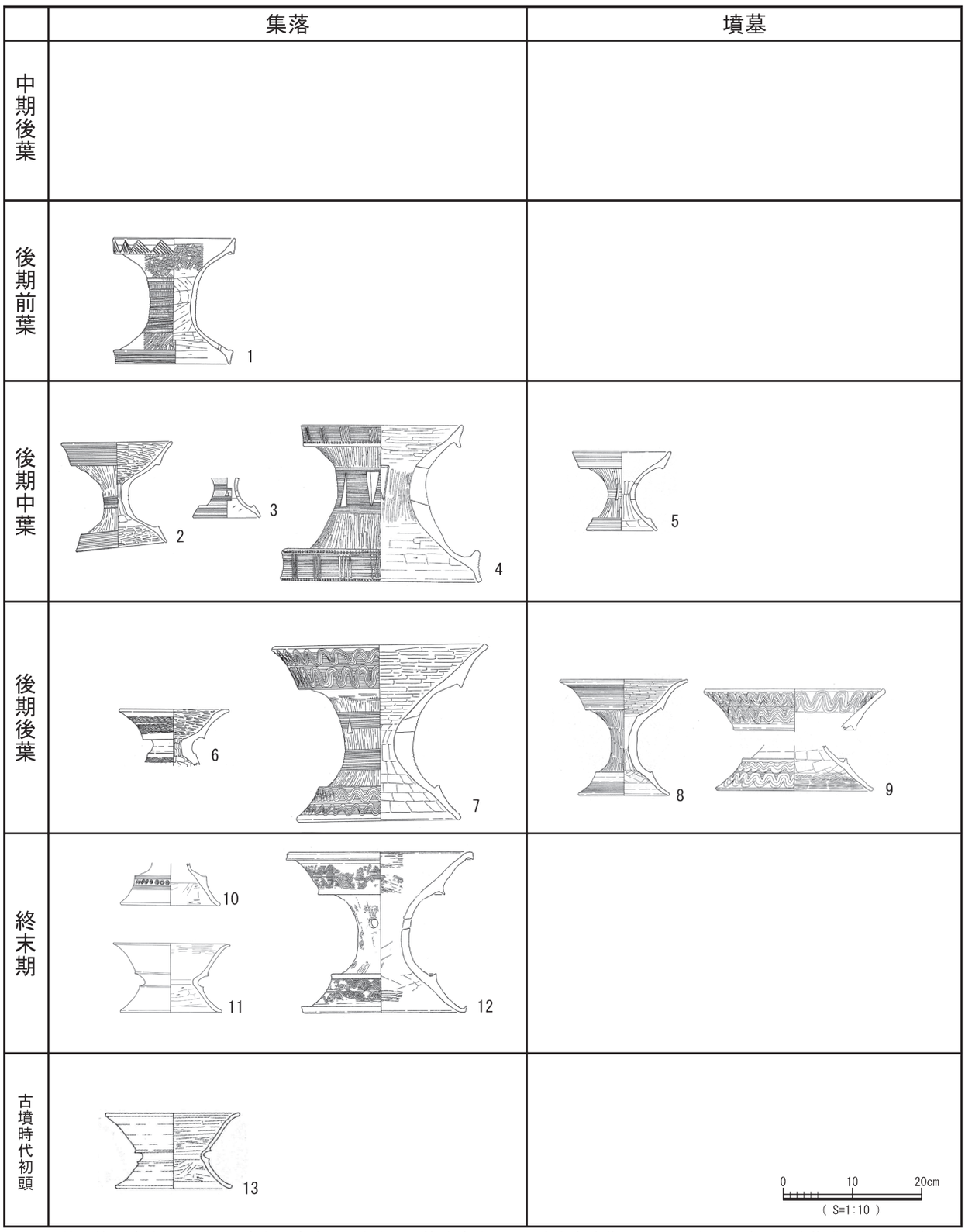
東伯耆型の大型器台は出現当初、非常に特徴的な形をしていたが、やがて鼓形器台のプロポーションに近づいていく。後期後葉の大型器台は後期中葉の筒部の長い形をした鼓形器台を大型化させたような器形となる。鼓形器台との影響関係は器形のみならず文様にもみられ、後期後葉以降、受部と脚部の外面には二段の波状文が施される（図 16- 7 ・ 9 ・12）。その一方、円形や馬蹄形の浮文など大型器台特有の施文もみられる。器形や文様に新たな要素が増えるが、筒部の凹線とそこに重なるように三角のスカシが入り、後期中葉の水溜り・駕籠据場遺跡出土の例の要素もしっかりと残されていることがわかる。

大型器台は終末期まで残るが、器形及び文様はほとんど変化せず、筒部の長い鼓形器台の器形に二段の波状文がつけられている。また、出土遺跡の種別は出現段階から終末期まで集落からの出土を主とする。

鼓形器台との共通点が多くみられる東伯耆型大型器台であるが、同時期の一般的な大きさの鼓形器台の筒部の収縮とは連動しない。また最後まで一貫して装飾性の高さを維持する。そのため、大型の鼓形器台ではなく、別の系譜のものとして区別する必要がある。

（4）因幡

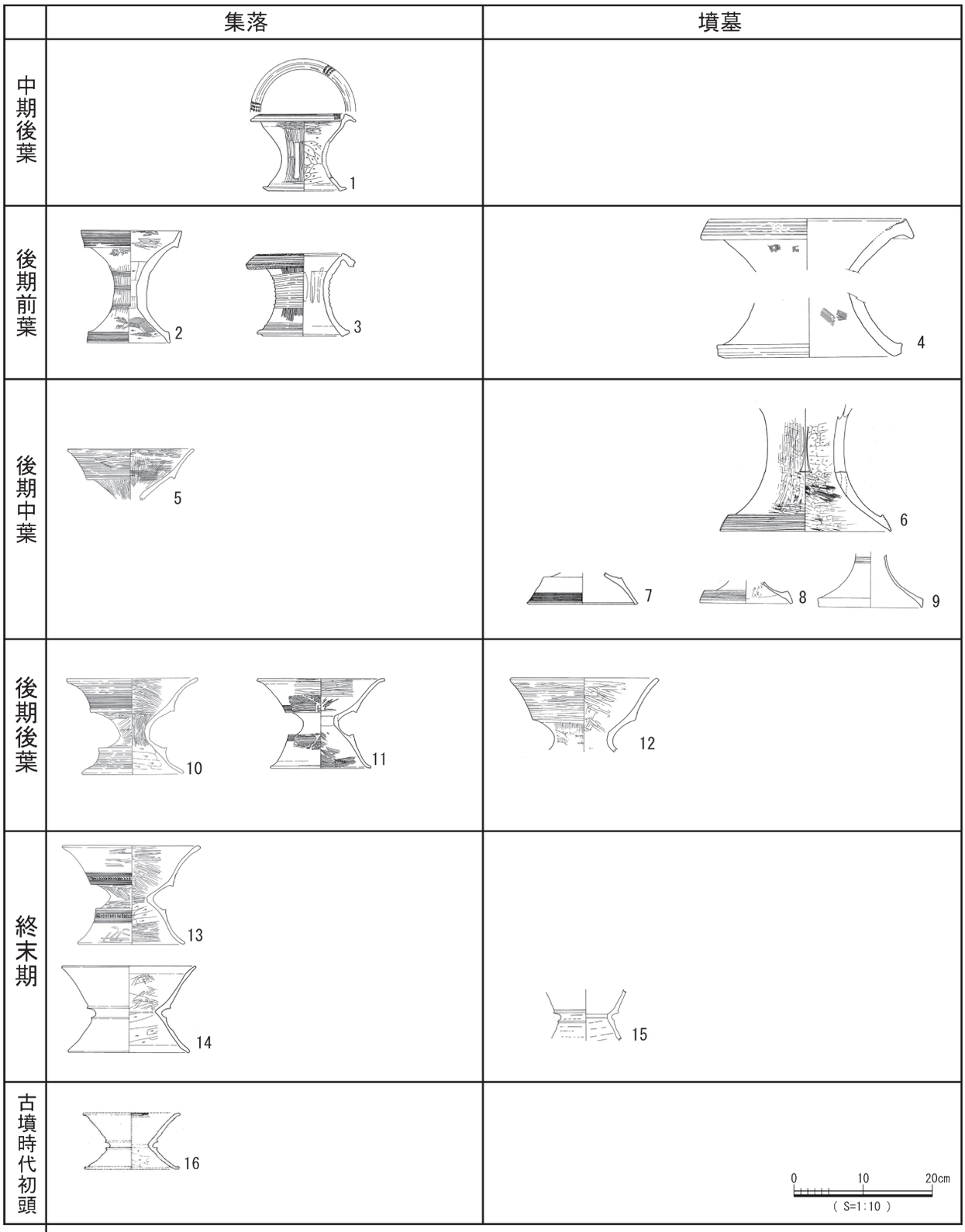
因幡地域に器台がみられるようになるのは、中期後葉以降である。岩吉遺跡から出土した器台は胴部が中央よりも少し下がったところでくびれ、口縁部を外側に折り返す形をしている。折り返された口縁部には凹線と円形刺突文列が三本を一単位として三方向に施されている。外面及び受部内面に赤色顔料が塗られ、胴



1・3:笠見第３遺跡　2・6・7:後中尾遺跡　4:水溜り・籠池遺跡　5:阿弥大寺墳墓群　8・9:大谷・後口谷墳墓群　10・11:宮内第一遺跡　11:長瀬高浜遺跡　12：妻木晩田遺跡

図 16　東伯耆における器台の変遷

因幡



1・3:岩吉遺跡　2・14：青谷上寺地遺跡　4:新井三嶋谷1号墓　5・10・11・12・13：秋里（西皆竹）遺跡　6:滝山猿懸平1号墓　7:西桂見墳丘墓　8・9:布施鶴指奥1号墓　15：糸谷1号墓　16:大桙遺跡

図 17　因幡における器台の変遷

部には隅丸長方形のスカシが入る（図 17-1）。この口縁を外側に折り返すものは次の後期前葉の段階まで残る。後期前葉のものは胴部のくびれがやや上昇し、ほぼ中央で最も細くなり、屈曲もなだらかになる。胴部のスカシはなく、くびれ部を中心に凹線が平行に引かれる（図 17- 3）。

鼓形器台は東西伯耆地域よりもやや早く、出雲地域と同じ後期前葉から出現する。鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡から出土したものは口縁と脚部がやや外反し、口縁・脚部外面に凹線、筒部には三条一単位の凹線が三単位入る（図 17- 2）。

後期中葉とされるもので器形全体のわかる良好な例は確認できていないが、上半部が比較的よく残る鳥取県鳥取市秋里（西皆竹）遺跡出土例から受部の幅が前段階に比べ幅が広くなっていることがわかる（図 17- 5）。因幡地域でも他地域と同様、受部・脚部の幅が拡張方向へと変化している。

後期後葉には新たな要素として、因幡地域の鼓形器台の最大の特徴であるスタンプ文が出現する。スタンプ文は受け部と脚部の外面、稜付近に一周するように入る（図 17-11）。

スタンプ文を大きな特徴とするのは鼓形器台ではなく、後期中葉の因幡地域を中心に分布する台付装飾壷である。台付装飾壷は後期中葉の前半の時期にしかみられない土器であるが、その模倣品なども含めると西は九州北部、東は北陸まで広く分布する土器である。因幡地域の中でも特に青谷上寺地遺跡などがある千代川以西に分布の中心があり、ここがスタンプ文土器の主な生産地と考えられている（松井 2013）。青谷上寺地遺跡では同じ形・文様の木製の台付装飾壷なども確認されている。スタンプ文は山陰地方の各地で台付装飾壷や鼓形器台のほか、注口土器などにも用いられるが、因幡地域から西に移るにつれ加飾性が低くなるようである（岩橋 2004）。

台付装飾壷では複数のスタンプ文が一つの土器に複数段に施文されることが多いが、鼓形器台にみられる文様は圏文とＳ字状文の二種が多く、基本的には受・脚部にそれぞれ一段ずつのみ施される。またスタンプ文の上下には凹線が数条伴うことが一般的である。

終末期に入ると他の地域と同様に文様の無文化と筒部収縮に伴う器形の扁平化が進行する。鼓形器台へのスタンプ文による加飾は終末期の前半まで確認できる（図 17-13）。終末期には完全に無文となり、土器全体の断面も「く」の字形となる（図 17-14）。

それぞれの地域を比較すると、後期中葉ごろに鼓形器台が出現し、後期後葉から終末期にかけて筒部の収縮と器形全体の扁平化が進む。施文は後期中葉から後葉ごろに始まるものが後期後葉の段階で最盛期を迎える。その後、時期の変化とともに施文の簡素化が進み、終末期前半まではわずかな施文が残るが、終末期の後半には無文になる。この器形と文様の変化は四地域全てに共通する。

一方、文様の内容は各地で異なり、ここに地域差が最も明確に現れる。各地域の文様の特徴は①東西出雲地域の筒部の凹線＋貝殻を用いた羽状文あるいはノの字文、②西伯耆地域は他の地域と共通した口縁・脚端外面の櫛描沈線のみ、③東伯耆地域の口縁・脚端外面の波状文、④因幡地域の口縁・脚外面の両付近にみられる帯状のスタンプ文である。東西伯耆地域と比べると、出雲地域と因幡地域は特に施文が頻繁にみられる。しかし、これらの特徴も終末期の前半には施文が減少傾向に転じることによって失われていく。そして終末期後半には、文様・器形の両側面において地域性がなくなり、無文による統一という消極的なあり方ではあるが斉一性が高まる。

西伯耆地域は鼓形器台の文様に大きな特徴は見られないが、大型器台の存在が大きな特徴といえる。この地域では後期後葉の鼓形器台にも筒部の長いものが残り、鼓形器台の器形にも他の地域との違いを指摘できる可能性がある。西伯耆地域が特に大型器台をもつ地域であることを重視すれば、当該地域には高さのある器台を意識する傾向があり、それが筒部の収縮を遅らせたと考えることも可能だろう。ただし、現時点では検証が不十分であるため、器高の高いまま維持することへの意識の強さが西伯耆地域の特徴となる可能性があるということを指摘するにとどめたい。

６－３．墳丘墓における器台の利用

本節では墳丘墓の突出部と器台の地域性を踏まえ、墳丘墓における器台の利用について考察を行う。

東西出雲地域では後期後葉に墳丘墓が多く造営された。そのうち出土数を明確にできる器台をまとめたのが表３である。伯耆、因幡地域はまとまった器台の出土がみられる例が少なかったため、表には入れていない。表３からは西谷３号墓の両主体部では東西出雲地域の特徴である羽状文をもつものが多くみられながらも、羽状文をもたいない器台も一定数含まれていることがわかる。東出雲地域の仲仙寺墳墓群は正式な報告書がなく詳細な数等の提示はできないが、ここでも筒部が無文のものと羽状文をもつものの両方が確認されている。島根県松江市的場土壙墓では無文のものはみられず、出土した器台には必ず出雲地域に特徴的な施文が施されている。表３に含まれる墳墓は必ずしも西谷墳墓群のように大型の墳丘墓であるわけではなく、大・中・小の四隅突出型墳丘墓や墳丘を持たない可能性のある墳墓を含んでいる。すなわち、墳墓の階

表３　墳丘墓にみられる器台の施文

	羽状文	ノの字	波状文	スタンプ文	凹線	不明・なし	総数
青木１号墓						7	7
的場土壙墓	2	4					6
西谷3号墓第１主体	15	5				9	29
西谷3号墓第４主体	28（1）	5				23	56
西谷2号墓墳頂部	5	3				16	24

層や地域に関係なく他の地域の特徴をもつ器台は使われていないことになる。東西伯耆地域は器台の特徴が明確にみられる後期後葉の墳墓の事例が少なく判断が難しい。東伯耆地域の大谷・後ロ谷墳墓群では１号墓において、東伯耆地域の特徴である波状文をもつものと筒部が長く筒部に凹線がみられるものが出土している。また、西伯耆地域の仙谷５号墓では西伯耆型大型器台とともに出土した鼓形器台に貝殻羽状文をはじめスタンプ文などをもつものは確認できない。因幡地域の門上谷２号墓でもスタンプ文をもつ破片が確認されているが、羽状文や波状文はみられない。

鼓形器台は各地域の集落遺跡からも多数出土していることから日常的な性格も少なからずあり、吉備地域の特殊器台のような特殊性を持たないと考えられる。ゆえに地域性がみられること自体は当然であり、特徴的な施文のないものが搬入され供献土器に含まれる可能性も否定はできない。しかし、今回確認した墳墓では明らかに他の地域の特徴をもつ器台の出土例はなく、用いる器台の地域性に意図的な選択がなされていたと考えて良いだろう。

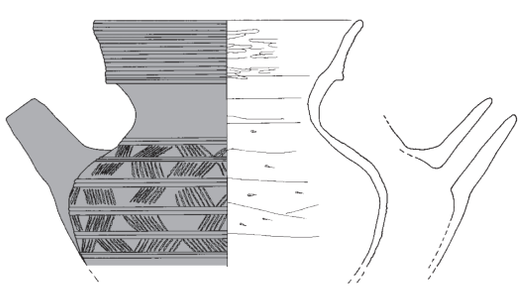
墳丘墓の変化との関連に目を向けたい。山陰地方独自の形である鼓形器台が出現する後期中葉は四隅突出型の突出部が大きく変化する時期である。また、器台の文様の地域的特徴が最も明確になる後期後葉は、西谷３号墓のように大型の四隅突出型墳丘墓が成立し、東西出雲地域において違いが最もはっきりと現れる時期である。そして、全ての地域で器形の扁平化と無文化が共通してみられた終末期は、突出部表現の曖昧なＶ類に分類される四隅突出型墳丘墓が各地に共通してみられるようになる時期である。このように各期における器台の地域性の変化は墳丘墓の変化と関連がみられ、器台と墳丘墓の関係の深さがうかがえる。

しかし、墳丘から出土する土器の器種構成においては四隅突出型墳丘墓やその他の墳丘墓の間に明確な差異・共通性が認められないことが指摘されている（重松 2007；山根 2007）。この器種構成の共通性の無さと器台の選択的利用という二つの事実は山陰地方における墓制の共有性の未熟さと地域の主体性の明確さを反映していると考えられる。反対に終末期の器台と突出部の共通性の高さは、この段階になってようやく山陰地方全体に及ぶような共通意識が芽生え始めたことを示しているといえる。

６－４．注口土器

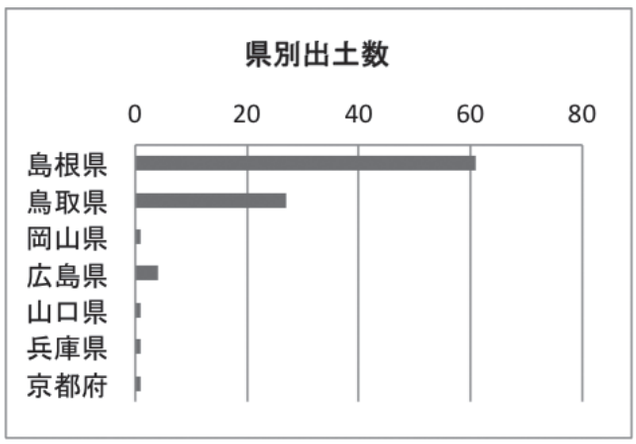
鼓形器台に加え、墳丘墓と深く関わる土器として注口付壷形土器（以下、「注口土器」）を取り上げる。ここで検討する注口土器は後期前葉から古墳時代の初頭にかけて山陰地方沿岸部を中心に分布するものを指す（図 18）。器形は在地の壷や甕に注口をつけた形をもつ。山陰地方の様式に含められており、当地域によくみられる土器として存在は知られているが大きな注目を集めている土器ではない。藤原俊晃は京都府峰山町の古殿遺跡で注口土器が出土したことに際し、この土器を取り上げた（藤原 1994）。また真壁葭子は『古事記』『日本書紀』『風土記』の中で出雲地域に関する医薬の中でも特に薬草についての記事との関わりという点で山陰形土器とされる甑形土器、低脚杯とともに注口土器を取り上げている（真壁 1997a・b,1999）。筆者の知る限りではこの後、注口土器をメインに取り上げた論考はない。今回、ここであえて注口土器を取り上げた理由は、後期中葉までの段階は分布の範囲が狭かったにもかかわらず、終末期の段階でその分布範囲と出土数が増えることなどが墳墓の変化と関わりがあるのではないかと考えたからである。本論文では藤原・真壁の集成を元にその後の事例を追加し、検討を行った。

今回の集成によって間壁が 1997 年に集成した 26



西谷3号墓第４主体
（後期後葉・墳墓）

図 18　弥生時代後期の注口土器の例



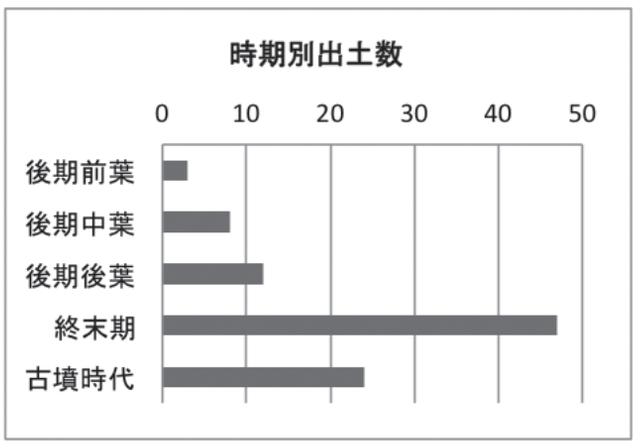


図 19　注口土器の県別・時期別出土数

例から 96 例へと事例数は増加した。注口土器は後期前葉に出現し終末期に急増する。分布の範囲はこれまで明らかになっていたものから大きな変化はなく、山陰地方沿岸部を中心に、西限は山口県、東限は京都まで分布する。山陰以外では広島県に 4 例、山口・兵庫・岡山・京都の 4 府県ではそれぞれ 1 例ずつしかなく、そのほとんどが山陰地方に分布する（図 18）。兵庫県や京都府など山陰地方以外の地域では終末期から古墳時代の例に限られる。山陰地方の中では西出雲地域に多く分布が集中しており、後期前葉からの連続性を確認できるのも西出雲地域である。西出雲地域では様々な集落から出土するというより、島根県出雲市古志本郷遺跡や同市山持遺跡など特定の集落に集中する。これらの集落遺跡は同一平野の中でも特に近接する集落遺跡群であり、ここを中心に注口土器の生産が行われていた可能性もある。出土する遺構の性格は溝や墳墓、旧河道や井戸など様々であるが、遺構外出土を除くと墳墓からの出土が多い。

墳墓における使用について目を向けてみると、墳墓からの出土が多いことは確かであるが、どの墳墓からも必ず出土するというものではない。興味深いのは、広島県や兵庫県など島根・鳥取県以外の周辺地域では、墳墓において鼓形器台を伴ってみられることが多い点である。例えば、広島県三次市矢谷墳墓群では、主体部からは鼓形器台が、周溝からは特殊壷・特殊器台がまとまって出土している。岡山県津山市観音免土壙墓（森田・村上 1982）も鼓形器台を伴って出土している。京都府京丹後市古殿遺跡（鍋田・戸原ほか 1988）と兵庫県豊岡市鎌田・若宮遺跡（瀬戸谷・宮村ほか 1990）でも鼓形器台とともに出土している。類例が少なく推測が大きくなるが、注口土器に鼓形器台を伴う例が多いことから注口土器を墳墓に用いる形が山陰地方に特有の形であるという情報が土器とともに拡散したとも考えうるだろう。

鼓形器台と墳丘墓の関係でも述べたように終末期は次第に斉一性を示し始める時期である。それと同じ時期に注口土器の分布する範囲が拡大することは単なる偶然ではなく、墳墓に関する情報の共有範囲が拡大、あるいはこれら地域間の交流関係に変化があったことを示すと考えられる。

7．墳丘墓からみる弥生時代の山陰地方

7－1．突出部の変化

本論文では突出部に焦点をあてた検討を行ってきた。最後に平面形態と突出部における立石の範囲という二つの視点から突出部の変化の検討を行い、そこからみえる突出部の機能・性格に迫りたい。

まず、平面形態について述べる。四隅を明確に表現するものは中期後葉に出現し、出現段階では三次と西出雲地域に踏石状石列によって隅を表現するⅠａ類と西城川流域の墳丘そのものの隅を楕円に突出させて削り出すことで表現するⅡｃ類に分かれる。先端が楕円形のⅡ類突出部は日野川流域に位置する妻木晩田遺跡の洞ノ原墳墓群を中心とする西伯耆地域に伝わる。続く後期中葉に突出部は長く伸びるようになる。江ノ川流域では平面形態が長方形のⅢ類がみられた。西伯耆地域の洞ノ原墳墓群にみられたⅡ類の先端楕円形突出部は、東伯耆地域の阿弥大寺墳墓群へと受け継がれる。後期後葉に入ると四隅突出型墳丘墓そのものの分布が出雲地域に限定されるようになる。出雲地域でも平野ごとに平面形態が異なり、西出雲地域の出雲平野は長方形のⅢｂ類、東出雲地域のうち安来平野では袋状のⅣｃ類、松江平野では辺が弧状に開くだけのⅤｃ類と先端が丸くなるⅡｃ類がみられた。

出現当初から平面形態に地域性がみられるが、当初は青木 4 号墓や田尻山 1 号墓など地域をまたいだ共通性もみられる。突出部は規模・構造ともに後期中葉に発達し、後期後葉に地域性が最も明確になる。その後、終末期に各地でみられる四隅突出型墳丘墓の多くは貼石が突出部付近において外側に伸びていくだけのⅤ類

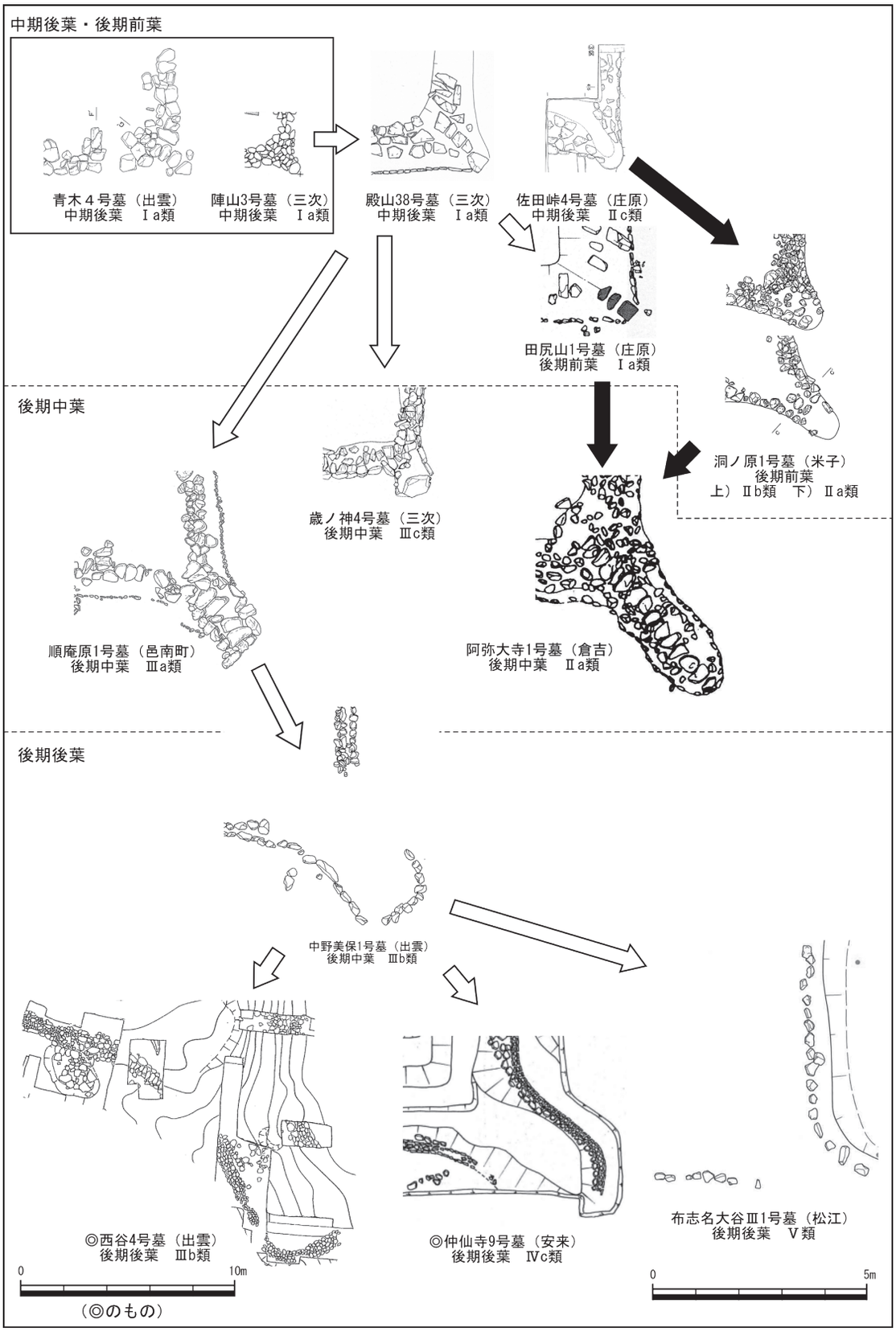

中期後葉・後期前葉
青木４号墓（出雲）
中期後葉　Ⅰa類
陣山3号墓（三次）
中期後葉　Ⅰa類
殿山38号墓（三次）
中期後葉　Ⅰa類
佐田峠4号墓（庄原）
中期後葉　Ⅱc類
田尻山1号墓（庄原）
後期前葉　Ⅰa類
洞ノ原1号墓（米子）
後期前葉
上）Ⅱb類　下）Ⅱa類
後期中葉
歳ノ神4号墓（三次）
後期中葉　Ⅲc類
順庵原1号墓（邑南町）
後期中葉　Ⅲa類
阿弥大寺1号墓（倉吉）
後期中葉　Ⅱa類
後期後葉
中野美保1号墓（出雲）
後期中葉　Ⅲb類
◎西谷4号墓（出雲）
後期後葉　Ⅲb類
◎仲仙寺9号墓（安来）
後期後葉　Ⅳc類
布志名大谷Ⅲ1号墓（松江）
後期後葉　Ⅴ類
0
10m
0
5m
（◎のもの）

図 20　突出部の変遷

に変化し、突出部が明確に表現されなくなる。だが、この段階でも西谷９号墓や宮山Ⅳ号墓では前段階の形態を維持するものが残る。このことから突出部による地域性の明示が出雲地域で特に意識されていたことがうかがえる。

続いて立石について述べる。立石は四隅突出型墳丘墓が出現する中期後葉の陣山墳墓群にすでにみられ、四隅突出型出現当初からみられる要素である。出現当初、立石は貼石と同じ大きさの石材が貼石から少し離れた所に置かれ、踏石状石列とは接していない。それが殿山 38 号墓で石材の大きさの選択がされるようになり、踏石状石列に接するようになる。立石における大きな画期は後期中葉にある。それまでの立石及び貼石は突出部の基部で止まり、突出部の先端を囲むことはなかったが、後期中葉の歳ノ神３・４号墓・順庵原１号墓・阿弥大寺墳墓群ではどの墳墓でも立石あるいは貼石の垂直にたてられたものが突出部を完全に囲むようになる。次の後期後葉にみられる大型の墳墓においても突出部の先端まで立石が巡るように配置される。

順庵原１号墓の突出部について渡辺貞幸は残存状況の良い東西突出部を比較し、両者が明らかに異なる構造をもつとことを指摘している。西では緩やかな傾斜を持ち先端の石材が横倒しに置かれるのに対し、東は水平に伸び先端の石材も垂直に置かれるため先端に約 50cm の段差ができてしまう。このことから西側突出部が開いた突出部であり、通路としての役割をしていたとした（渡辺 2005）。さらに西谷３号墓の突出部についても四方の突出部の稜線は角にならず面取りされ、墳頂と墳裾を繋ぐ斜道になっていたとした上で、踏石状石列をもつに至った背景ついて「稜線すなわち墓道における儀礼の荘厳かと墳丘の大型化に伴い斜道をより緩やかにする必要があったため」と述べている（渡辺 2003）。渡辺によるこれらの指摘は妥当なもので、筆者自身も踏石状石列の出現契機は墳丘内部の高まりであり、突出部の機能の一つは通路としての利用にあると考えている。

突出部の機能についてはこれまでに四隅における結界という思想が背景にあると指摘するものもあるが、立石が四隅突出型墳丘墓出現当初からあること、通路として機能しない突出部が後期中葉段階から立石によって囲まれるようになることから、結界や墓域空間区画の役割は突出部にではなくむしろ立石にあったとする方が妥当だろう。仮に突出部そのものに結界の意味があるのならば出現当初から立石が突出部にもっと明確に置かれているはずである。

以上の検討から、突出部に本来の通路としての役割と地域のシンボルとしての役割を想定し、その変遷と性格の変化に三つの段階を設定する。①中期後葉から後期前葉までの突出部の発達段階、②後期中葉から後葉までの突出部の地域性が明確になり象徴的性格の付加される段階、③終末期の突出部表現の崩壊と墳丘墓共有範囲拡大の段階である。第二段階の始まりは阿弥大寺墳丘墓・順庵原１号墓における突出部の長大化の開始と突出部の平面形態の多様化が始まったことを重視し、墳丘が大型化する後期後葉以降ではなく阿弥大寺墳墓群が造営された後期中葉に画期を設け、後期後葉はその傾向が最も強くなる時期とみている。そして第三段階の終末期には各平野のシンボルとしての役割が薄れ、山陰全体で共有される墓制へと変わる。ただ、突出部そのものは残ることから通路としての役割はこの段階まで維持されると考えられる。

７－２．墳丘墓における土器祭祀

墳墓における土器を用いた儀礼といえば、楯築墳丘墓の例に対する近藤義郎の指摘がまず浮かぶ。近藤は楯築墳丘墓の調査成果からその内容の復元を試み、「特殊壷からおそらくまず脚付直口坩に注がれ、さらに直口坩から高坏に注がれた液体（酒）を亡き主張とともに飲みその霊力を継承するための共飲の直接の道具であったに違いない。」と述べている (近藤 1992)。また西谷３号墓では第４主体の墓壙に重なるように四つの柱穴が確認され、墓壙上には朱のついた円礫を中心に土器が集積されていたことが報告されている（渡辺 1993）。円礫が墓壙上の土器とともに出土する例は出雲地域の中で他にも確認されており、多少なりとも墳墓における祭祀が共有されていたことがわかる。山陰地方の墳墓出土土器の検討を行った重松辰治は、日常土器を用いることや四隅突出型墳丘墓を中心とした墳丘墓ほど高坏や低脚杯といった器種を重点的に選ぶ傾向にあることなどから、飲食行為を伴う葬送儀礼を想定した（重松 2007）。この飲食儀礼が『魏志倭人伝』の「…喪主哭泣、他人就歌舞飲酒。」という記述との関連が想定されていることはいうまでもない。

本論文では中期後葉から後期初頭の脚付注口付鉢と後期初頭の注口土器の二つの注口をもつ土器を取り上げた。どちらの土器も中国地方山間部と山陰地方の沿岸部の墳墓からの出土があり、これらの地域では液体の入った土器を墳墓に捧げる行為が儀礼の一部として長く続けられていたと推察される。特に、後期後葉以降にみられる山陰地方の注口土器は大きさ 20cm 前後と大きくない。かつ山間部の脚付注口付鉢ほど装飾性も高くない。そのため儀礼行為の場面において装飾性のために供え置かれたとは考えにくく、後期以降の山陰地方沿岸部を中心に広がる注口土器は液体を注ぐために用いられたと考える方が妥当だろう。そしてこれら注口土器の存在は、墳丘墓で実際に液体を注ぐ

行為を行なっていたことを裏付け、飲食儀礼の存在をより確かにするものであるといえる。また、墳丘墓に用いられる器台の地域性が強く意識されていたことと併せて考えると、いかに墳丘墓での儀式が同時の人々にとって重要な存在であったのかがわかる。

7－3．墳丘墓の造営背景

では、このように大型の墳丘墓の造営を可能にし、地域性が強く意識するに至った背景には何があったのか。

山陰地方は日本海に面し、また多くの潟が形成され、自然の良好な港が多くみられる地域である。良好な潟に加え、なだらかな海岸線が続くことも山陰地方内部での交流にも大きく貢献しただろう。山陰地方各地にみられる墳丘墓を造営した諸集団も交易によって力をもったのだろう。それを物語るのが鳥取県の青谷上寺地遺跡や島根県の山持遺跡などである。青谷上寺地遺跡は弥生時代の大集落であり、多くの朝鮮半島系土器とともに装飾性の高い木製品が出土している。その中には後期中葉のスタンプ文で飾られた台付装飾壷の木製品や坏の外面に花弁が彫られた高坏など精製木製容器がある。それは九州や北陸へも運ばれた。これらの精製木製容器は集落での消費ではなく流通させることを目的とした一種の商品とされ、特に多くの出土がみられる青谷上寺地遺跡は「青谷上寺地ブランド」の発信地とも言われる（君島 2015）。加えて、このような津に面する代表的な集落では手工業生産の痕跡が多く残されている。東出雲地域の墳丘墓が集中する荒島丘陵の塩津丘陵遺跡でその様子がよく確認できる。本論文において取り上げた注口土器も『古事記』などの記述から薬草が出雲地域の特産物の一つであった可能性を指摘されている（真壁 1997）。中身が薬草かどうかは別として注口土器が交易品としての性格をもつ可能性もあるだろう。山陰地方の集落のあり方からは武力闘争を伴うような緊迫状況は指摘できないとする意見もあるが（濱田 2006；中川 2015）、これもまた土地争いなどよりも交易などの経済活動を基盤にしていたことを反映しているのかもしれない。

上記のような交易が盛んになるにつれて、それを統括し、利害の調整が必要になる人物が必要になる。こうして力をもつようになった人物、集団が四隅突出型墳丘墓をはじめとする大型の墳墓を造営したのだろう。加えて、交易を通した対外的な接触の機会が多いということはそれだけ自らの集団とその外側の存在を意識する機会が多いということになる。そのため、自らの集団を明確にし、構成員の帰属意識を高めるためのシンボルが必要とされた。それが突出部や器台の明確な地域性に現れているのではないだろうか。

墳丘墓の地域性は、後期後葉の段階まで、平野程度の範囲を越える共通性はなかったが、終末期にその範囲が広がり始める。これは内と外の意識の範囲が変化したことを示している。弥生時代終末期は庄内式土器に代表される畿内に起源をもつ土器が山陰地方を含め日本列島内に広く分布する時期である。これ以前の段階にも土器の搬入・搬出はあるが、庄内系土器の移動は一線を画する量である。一方、注口土器のように吉備系土器や山陰系土器が広範囲に広がるようになる時期でもあり、東日本では東海系土器の目立つようになる時期である。つまり弥生時代終末期とは、新たな地域・勢力の接近と接触によって、それまでの交易基盤が大きく変化しようとしていた時期とみられる。山陰地方の中においては、後期後葉の地域性はあるが、土器の器種構成や形態そのものの変化というレベルにおける共通性の高さは関係性の近さを表している。交易を経済の大きな基盤としたことから常に多くの対外関係をもっていた山陰であるが、新たな外側の接近を意識した時に相対的にみれば類似性の高い山陰地方全体に及ぶ範囲の中での紐帯が芽生えたのだと考えられる。

古墳時代の前方後円墳は権力の中心であり、その階層性や関係性を示すための役割を果たしていたとされる。山陰地方の弥生時代終末期にみられる墓制の共有はそれとは性格が異なるものであるが、大型の墳丘の形態によって集団のつながりを示すというシステムは古墳時代の前方後円墳へと繋がるものといえるだろう。

9．終わりに

本論文中において明らかにすることができた結論は、これまでの議論から大きく歩を進めることができたとはいえないが、四隅突出型墳丘墓が造営された全時期を通じた土器のあり方と併せた結果について言及できたことは一つの成果であると考えている。

その一方で、造営の背景となる集落の変化や鉄器の分布、手工業生産と製品の流通などの部分については具体的な検証を行うことができなかった。また、終末期に斉一性の萌芽がみられることを結論としたが、その斉一性が古墳時代にどう変化し、また前方後円墳の斉一性とどう関わっていくのかについては触れることができなかった。これらを今後の課題としたい。

謝辞

本論文は 2019 年度に東京大学大学院人文社会系研究科へ提出した修士論文について加筆、修正を行ったものである。

執筆にあたり、指導教員である設楽博己先生をはじ

め、大貫静夫先生、佐藤宏之先生、福田正宏先生には多大なるご指導をいただきました。資料調査に際しては、出雲弥生の森博物館、島根県埋蔵文化財センター、大山町教育委員会、鳥取市埋蔵文化財センター、鳥取県埋蔵文化財センターの皆様にご高配を賜りました。

出雲弥生の森博物館坂本豊治様、鳥取県埋蔵文化財調査センター松井潔様にはご多忙にも関わらず、お話をお伺いするため本当に多くのお時間を割いていただきました。

末筆ではありますが、記して御礼を申し上げます。

註

1）編年における弥生時代中期と後期の判別については胴内部のケズリが頸部直下に到達することを後期の始まりの指標としている。

2）朝鮮半島起源説の多くは山本と同様に高句麗に起源を求めるものが大半であるが、中村春壽は突出部の意味や突出部を意識した位置からの土器の出土から大邱鳩岩洞や慶州朝陽洞の例との関連づけ四隅突出型墳丘墓を増設埋葬墓と積石塚の両要素の混同の結果生まれたものであるとした（中村 1979）。

3）出雲地域や三次盆地周辺に限らず丹後半島などにおいても四隅を意識した配石の有無についての言及もみられる（仁木 2007、肥後 2010 など）。しかし、図にトーンを載せないでみるとどの部分が隅を意識した配石なのかが判別できないものも多く、筆者は四隅を意識していると判断するのは難しいと考える。

4）波来浜遺跡は複数の貼石墓がみられる遺跡である。四隅を意識した配石をもつ可能性のある方形貼石墓もあるが、丹後半島の例と同様に配石の不明確さから本論文では四隅突出型墳丘墓には入れていない。

5）未調査であるが隣接する 8 号墓も四隅突出型墳丘墓の可能性が高いとされている。

6）後期中葉の日下 1 号墓出土の例は口縁と脚部の一部しかなく、全体の形を復元することは困難であるが、口径及び脚径に対して端部の幅が狭い。後期中葉の段階では鼓形器台口縁部の幅も未発達のため全形がわからず判断は難しいが、後期中葉の鼓形器台としては筒部径が太く、口縁径に対する脚端部の幅も狭いことから皷型器台とは異なる系譜のものと判断した。

7）本文でも後述しているが本論文を含め、山陰地方では甕の変化を軸として併行関係が捉えられている。そのため、この筒部収縮の変化の早さの違いが、併行関係のずれに伴うものである可能性も多分に考えられる。しかし、西伯耆地域に口縁・脚部の幅を変化させない大型器台があることを考慮して、ここでは西伯耆地域の特徴として肯定的に捉えたい。

8）観察から、秋里遺跡などの器台ではスタンプ文ののちに凹線が重ねられているものが多かったが、妻木晩田遺跡のものは凹線の上にスタンプ文が重ねられていたことも西伯耆地域での生産と判断した理由の一つである。しかし、この順序の違いが地域差と言えるかは今後詳細な検討と観察事例の蓄積を待って判断する必要があると考えている。

引用文献

赤澤秀則　1992 『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会

赤澤秀則　2005 『堀部第 1 遺跡 : 鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査 1』鹿島町教育委員会

出雲考古学研究会　1985 『古代の出雲を考える 4　荒島墳墓群』

石尾政信・村田和弘　2007 『京都府遺跡調査概報　第 121 集』京都府遺跡調査概報 121 京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊藤実　2005 「四隅突出型墳丘墓と塩町式土器 : 四隅突出の思想とその背景」『考古論集 : 川越哲志先生退官記念論集』pp.375-398

今岡一三・小林謙一・春成秀爾・坂本稔・尾嵜大真・新免歳靖・松崎浩之　2005 『山持遺跡 (Vol.1)』国道 431 号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2　島根県教育委員会

今岡一三・平石充・松尾充晶　2006 『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』国道 431 号道路改築事業 (東林木バイパス) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 島根県教育委員会

岩橋孝典　2004 「装飾壷・スタンプ文土器からみた弥生時代後期の出雲地域」『古代文化研究』12　pp.1-28 島根県古代文化センター

内田才・東森一良・近藤正　1966 「島根県安来平野における土壙墓」『上代文化』36 pp.12-31

大賀靖浩　1988 『水溜り・駕籠据場遺跡，森藤第 3 遺跡発掘調査報告書』東伯町文化財調査報告書 13 東伯町教育委員会

大橋雅也　1992 「器台形土器」『吉備の考古学的研究（上）』pp.259-277　山陽新聞

岡崎 雄二郎　1983 『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会

落田正弘　1996 『陣山遺跡』三次市教育委員会

小野山節　1979 「古墳と王朝の歩み」『古代史発掘』6 pp.22-54 講談社

尾本原勇人　2000 『宗祐池西遺跡発掘調査報告書』三次市教育委員会

片岡詩子　1986 『石台遺跡』馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告 1 島根県教育委員会

門脇俊彦　1973 『波来浜遺跡発掘調査報告書』島根県江津市

川原和人　1978 「島根県における発生期古墳」『古文化談叢』4 pp.40-57

川原和人　2013 「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」『古文化談叢』70 pp.1-27

北浦弘人・鬼頭紀子・森本倫弘・野口真吾　2000 『青谷上寺地遺跡 2』鳥取県教育文化財団調査報告書 68 鳥取県埋蔵文化財センター

君嶋俊行　2015 「青谷上寺地遺跡をめぐる交流」『人・もの・心を運ぶ船 : 青谷上寺地遺跡の交流をさぐる』第 6 回青谷上寺地遺跡フォーラム予稿集 pp.45-47　鳥取県埋蔵文化財センター

桑原隆博　1986 「四隅突出型方形墓覚書（1）」『芸備』第 17 集

桑原隆博　2005 「四隅突出型墳丘墓の新展開」『季刊考古学』92 pp.44-49

小原貴樹・吾郷信一・藤原裕子　1992 『日下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会・日下古墳群調査団

近藤正　1972 『仲仙寺古墳群』安来市教育委員会

近藤義郎　1977 「古墳以前の墳丘墓 : 楯築遺跡をめぐって」『岡山大学法文学部学術紀要』37　pp.1-21

近藤義郎　1983 『前方後円墳の時代』岩波書店

近藤義郎　1992 『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会

坂本豊治　2006 『西谷墳墓群 : 平成 14 年～ 16 年度発掘調査報告書』出雲市教育委員会

佐々木直彦・向田裕始・梅本健治・鍛冶益生・沢元保夫　1986 『歳ノ神遺跡群　中出勝負峠墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター

調査報告書 49 広島県埋蔵文化センター
佐原真　1976 『弥生土器』日本の美術 10 No.125
重松辰治　2007 「山陰地方における墳丘墓出土土器の検討」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』 pp.67-89　島根県古代文化センター
清水真一　1992 「因幡・伯耆地域」『様式と編年 山陰・山陽編』目耳社 pp.355-412
鈴木忠司・植山茂　1984 『小池古墳群』大宮町文化財調査報告 3 大宮町教育委員会
瀬戸谷晧・宮村良雄・松井敬代・大澤由美　1990 『鎌田・若宮古墳群』豊岡市文化財調査報告書 / 豊岡市立郷土資料館 23 豊岡市立郷土資料館
妹尾周三　1992 「備後地域」『様式と編年 山陰・山陽編』pp.155-237　目耳社
妹尾周三　1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 63　広島県埋蔵文化センター
田中義昭　1992 「付章　島根県鍵尾遺跡出土の土器について」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』pp.136-148　島根大学法文学部考古学研究室
都出比呂志　1991 「日本古代の国家形成序説 : 前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』343 pp.5-39
椿真治・伊藤智・神柱靖彦・山根肇・安達誠一郎・渡邊真二・井谷朋子・渡辺正巳・柴崎晶子・南武志　2008 『恵谷古墳群 岩鼻古墳群 上講武殿山城跡 砥石遺跡 沢下遺跡 元宮遺跡』島根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1 島根県教育委員会
寺沢薫　1996 「弥生の墓 : 方形周溝墓と四隅突出方形墓」『戦後 50 年　古代史発掘総まくり』アサヒグラフ別冊 pp.254-261
鳥取県教育文化財団　1981 『長瀬高浜遺跡 4』鳥取県教育文化財団調査報告書 6
中尾秀信・今岡 一三・山本清　1989 『間内越 1 号墓　間内越遺跡』松江市文化財調査報告書 42 松江市教育委員会
中川寧　2015 「山陰の集落と墳墓の関係 : 島根県東部の検討を通して」『古代文化』67　pp.52-60
長田康平　2017 「父原墳丘墓」『新鳥取県史』pp.778-779　鳥取県
中村徹・西浦日出夫・小谷修一　1992 『東桂見遺跡・布勢鶴指奥墳墓群』鳥取県教育文化財団調査報告書 29 鳥取県教育文化財団
中村春壽　1979 「新羅系文化と日本」『月刊韓国文化』12 月 pp.14-17
中野知照　1990 『下坂 1 号墳』郡家町文化財報告書 12 郡家町教育委員会
中野知照・中野美佐子　2001 『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書』岩美町文化財調査報告書 22 岩美町教育委員会
名越勉　1992 「因幡地域の弥生墳墓・弥生墳丘墓」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』pp.18-24 島根大学法文学部考古学研究室
名越顕秀・錦田剛志　2001 『布志名大谷Ⅲ遺跡』一般回道 9 号松江道路 (運結部) 建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 2 島根県教育委員会
鍋田勇・戸原和人・藤原敏晃・黒坪一樹　1988 『古殿遺跡』京都府遺跡調査報告書 9 京都府埋蔵文化財調査研究センター
仁木聡　2004 『中野美保遺跡』一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 4 島根県教育委員会
仁木聡・岩橋孝典・重松辰治　2007 『順庵原 1 号墓の研究　島根県邑智郡邑南町（旧瑞穂町）所在　最初に発掘調査された「四隅突出型墳丘墓」』島根県古代文化センター調査研究報告書 37 島根県埋蔵文化財センター
仁木聡　2007 「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』pp.21-31 島根県古代文化センター
野島永　2018 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書』広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書 第 4 冊 庄原市教育委員会発掘調査報告書 30　広島大学大学院文学研究科考古学研究室・庄原市教育委員会
濱田竜彦　2006 「山陰地方における弥生時代集落の立地と動態 : 大山山麓・中海南東岸を中心に」『古代文化』58-2 pp.82-95
原田雅弘・濱田竜彦・遠藤秀光・宮川紳　1996 『宮内第 1 遺跡 宮内第 4 遺跡　宮内第 5 遺跡　宮内 2・63 ～ 65 号墳』鳥取県教育文化財団調査報告書 48 鳥取県埋蔵文化財センター
春成秀爾　1979 「古墳出現前後の出雲と吉備」『松江考古』2 pp.17-31
東森市良　1989 『四隅突出型墳丘墓』ニュー・サイエンス社
肥後弘幸　2010「方形貼石墓概論」『京都府埋蔵文化財論集』第 6 集 pp.55-72
日野琢郎・田中史郎　1984 『泰久寺遺跡発掘調査報告書：中峯地区』関金町教育委員会
平川誠　1982 「西桂見遺跡」『えとのす』18　pp.141-146
藤田憲司　1979 「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第 64 巻 第 4 号 pp.333-364
藤田憲司　2010 『山陰弥生墳丘墓の研究』日本出版ネットワーク
藤田等・赤澤秀則　2005 『古浦遺跡』鹿島町教育委員会
藤原敏晃　1994 「古墳出現前後の注口土器について」『京都府埋蔵文化財情報』第 51 号京都府埋蔵文化財調査研究センター
船越元四郎・諸田良・富永源十郎・大村雅夫・森田純一・清水真一・山本芳彦・小原貴樹・卜部吉博・杉谷愛象・中井幹雄・本池啓子・拓植早苗　1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青木遺跡発掘調査団
前田均　2000 『滝山猿懸平墳墓群』鳥取市教育福祉振興会
前田均・谷口恭子　1991 『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市文化財報告書 30 鳥取市教育委員会
真壁葭子　1997a 「古代出雲における医薬技術への憶測 : 大量の青銅器出土に関係して」『神女大史学』14 pp.27-78
真壁葭子　1997b 「出雲世界の中の注口土器」『東アジアの古代文化』93 pp.44-59
真壁葭子　1999 「弥生時代の九州的注口土器」『神女大史学』16 pp.62-87
牧田公平　2001 『沖丈遺跡』邑智町教育委員会村田　晋 2016「弥生時代中国地方における脚付長頸壷形土器に付いて」『広島大学考古学研究紀要』第 8 号 pp.33-46
牧本哲雄・小谷郁夫・小山浩和・家塚英詞・坂本嘉和・西川雄大・岩井美枝・前島ちか　2004 『笠見第 3 遺跡 2』鳥取県教育文化財団調査報告書 86 鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター
道上康仁　1987 『大判・上定・殿山』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 57 広島県埋蔵文化財センター
松井潔　1996 「山陰東部における後期弥生墓制の展開と画期」『考古学と遺跡の保護 : 甘粕健先生退官記念論集』pp.119-139
松井潔　1997 「東の土器・南の土器 : 山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態」『古代吉備』9 pp.40-67
松井潔　2006 「弥生時代後期の地域社会」『鳥取県埋蔵文化財センター紀要』1 pp.11-34
松井潔　2013 「台付装飾壷」『みずほ別冊　弥生時代研究の群像 : 七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念』pp.359-376

松井潔　2015 「大型器台の組列とその機能 :「西伯耆型」大型器台と「東伯耆型」大型器台」『古代文化』67 pp.61-71
松本岩雄・東森市良・前島己基　1977 『弥生式土器集成』八雲立つ風土記の丘紀要 1 島根県八雲立つ風土記の丘資料館
松本岩雄　1992 「出雲・隠岐地域」『様式と編年 山陰・山陽編』目耳社 pp.413-482
松本岩雄　2003 『宮山古墳群の研究』島根県教育委員会
松本岩雄　2003 「出雲の四隅突出型墓」『宮山古墳群の研究』pp.157-180　島根県教育委員会
松本哲　2000 『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ』大山町埋蔵文化財調査報告書第 17 集 大山町教育委員会
三宅博士・足立克己・柳浦俊一・広江耕史・丹羽野裕宮本徳昭・赤澤秀則・平野芳英　1985 『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について　資料集』第 18 回埋蔵文化財研究会
向田裕始　1978 「田尻山古墳群」『中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』(1)pp.187-215 広島県教育委員会
森浩一・松藤和人　1994 『糸谷古墳群』同志社大学文学部考古学研究室
森下哲哉・真田廣幸　1982 「阿弥大寺四隅突出型墳丘墓群」『えとのす』新日本図書
森下哲哉　1986 『大谷・後口谷墳丘墓発掘調査報告』倉吉市文化財調査報告書第 40 集 倉吉市教育委員会
森下哲也・根鈴智津子・竹宮亜也子　1992 『柴栗古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 67 集 倉吉市教育委員会
森田友子・村上幸雄　1982 『稼山遺跡群Ⅳ』久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4 久米開発事業に伴う文化財調査委員会
山本清　1975 「出雲四隅突出型方墳」『日本の中の朝鮮文化』28（山本　清 1989『出雲の古代文化』六興出版に収められているものを参照。本文では論考の年代順の混乱を避けるため初出年を記載。）
山根航　2007 「墳墓祭祀の一様相」『島根考古学会誌』24 pp.83-100
山枡雅美・原田雅弘　1990 『秋里遺跡（西皆竹）』鳥取県教育文化財団報告書 25 鳥取県教育文化財団
湯村功　2017a 「藤和墳丘墓」『新鳥取県史』pp.498 鳥取県
湯村功　2017b 「徳楽方墳」『新鳥取県史』pp.661-667 鳥取県
米子市埋蔵文化財センター編　2015 『尾高浅山遺跡 弥生時代の環濠遺跡と墳丘墓』米子市埋蔵文化財センター資料整理報告第 1 集　米子市文化財団
渡辺貞幸　1992 「Ⅱ部 西谷墳墓群の調査（Ⅰ）」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室
渡辺貞幸　1993 「弥生墳丘墓における墓上の祭儀 : 西谷 3 号墓の調査から」『島根考古学会誌』 pp.153-160
渡辺貞幸　2003 「四隅突出型墳丘墓の「突出部」」『新世紀の考古学 : 大塚初重先生喜寿記念論文集』pp.219-233
渡辺貞幸　2005 「順庵原 1 号墓の突出部について」『考古論集 : 川越哲志先生退官記念論集』pp.367-374
渡辺貞幸・坂本豊治　2006 『西谷 2 号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第 8 冊出雲市教育委員会・島根大学法文学考古学研究室
渡辺貞幸・坂本豊治　2015 『西谷 3 号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第 14 冊　出雲弥生の森博物館研究紀要第 5 集　島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館

挿図出典

図1.2　筆者作成
図3　1：藤田・赤澤2005　2：牧田2001　3：仁木2004　4：門脇1973　5：鈴木・植山1984　6:石尾・村田2007　より引用・一部改変
図4　1：尾本原2000　2：落田1996　3:：道上1987　4：野島2018(再トレース)　5：妹尾1982　より引用・一部改変
図5　1:今岡2006　2:米子市埋蔵文化財センター2015 3:松本哲2000 より引用・一部改変
図6　1:野島2018 2:今岡2006 3:門脇1973 4:北浦・鬼頭ほか2000 より引用・一部改変
図7　1:妹尾1982 2:尾本原2000 3:松本哲2000　より引用・一部改変
図8　1: 向田1978・佐々木ほか1986 2:島根県埋蔵文化財センター2007　より引用・一部改変
図9　1・2:松本哲2000 3:小原1992 4:森下・真田1982 5:森下ほか1992 6: 中野知・中野美20017: 中村徹・西浦ほか1992 8:平川1982 9:前田2000　より引用・一部改変
図10　1:森下1986　2:日野・田中1984　3:今岡ほか2006 4:仁木2004　5・6:渡辺・坂本2015　より引用・一部改変
図11　1・2:近藤1972　3:椿ほか2008 4:中尾ほか1989 5: 名越・錦田2001　より引用・一部改変
図12　坂本2006
図13　1:出雲考古学研究会1985 2:松本岩2003 3:長田2017 4:松井1996 5:森・真田1982　より引用・一部改変
図14　1:松本・東森ほか1977　2:片岡1986　3・7・8・9:内田・東森ほか1966　4・5・6・10・13・14:今岡ほか2005　11:渡辺・坂本2015　12:赤澤1992　14:田中1992　15:出雲考古学研究会1985　より引用・一部改変
図15　1:船越・諸田ほか1978　3: 米子市埋蔵文化財センター2015 2・4・5・6・7・10・11・12・13・14・15・19・21:松本哲2000　8・9:小原・吾郷ほか1992　17・18:長田2017 20:湯村200b　より引用、一部改変
図16　1・3:牧本・小谷ほか2004　2・6・7: 三宅・足立ほか1985　4:大賀1988　5:森下・真田1982　8・9:森下1986　10・11:原田・濱田ほか1996　11:鳥取県教育文化財団 1981　12:松本哲2000　より引用・一部改変
図17　1・3:前田・谷口1991　2・14:北浦・鬼頭2000　4:中野知・中野美2001　5・10・11・12・13:山枡・原田1990　6:前田2000　7:平川1982　8・9: 中村徹・西浦ほか1992　15:森・松藤1994　16:三宅・足立ほか1985
図18　渡辺・坂本2015
図19　筆者作成
図20　筆者作成

表1・2・3　筆者作成

Mound burial at San-in district in the late Yayoi period Period in Northeast Japan

-Focusing on regionality of vessel stand-

Tomoe KASAMI

This study argues that the roll of Yayoi burial mound which called Yosumi-tosshutugata-hunkyubo in San-in district. The tumulus is a square mounds with four protruding corners. This study approaches the problem from two different angles. First is shape-type of protuberance, and second is pottery.

From the end of middle Yayoi period to the first of late Yayoi period, there are two interaction routes. One is between the west of the Miyoshi basin and the west of Izumo and the other is between the east side of Miyoshi basin and the west of Hōki. And the author focused on two kinds of potteries with attached foot in this period. Result of analysis of potteries supported the result of interaction routes. During the middle third of late Yayoi period, the length and regionality of protuberance is become long and clear. The regionality is appearing not only in protuberance but also in the type of mound. Next, Yosumi-tosshutugata-hunkyubo reached its peak in Izumo-area in the third late Yayoi period. To analyze of after the late of Yayoi-period, the author focus on Vessel stand. Vessel stand has appeared in the end of middle Yayoi period. The regional features of vessel stand are in patterns, and it is the most clear in the third of late Yayoi period. But, the features were lost in the final stage of Yayoi period. These phenomena are the same protuberance.

Through analyze from two aspects, the author shows that late Yayoi period in San-in area can divide into three stages. First, developmental stage of mound burial. Second, the peak stage of development. And in this stage, the regionarity of protuberance be most clear too. Final stage is occurrence of similarity with mound type and shape-type of protuberance in whole San-in area.